337
396

始

特275
188

江原萬里 著

聖書的現代經濟觀

昭和六年一月廿六日 帝國圖書

聖書的現代經濟觀序

本書に收錄するところの長短凡そ三十篇は、我等信仰に由つて生くる基督者は現代の經濟社會を如何に觀又此の內に在つて如何に生活するか、聖書は之に就いて何を敎ゆるかの問題に關する感想及び論說である。

聖書は云ふ。「まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物（生活必需品）は汝らに加へらるべし」（マタイ傳第六章第三十三節）と。然るに古き經濟學は云ふ。「人は皆各最も良く自己の利害を知る。されば各人皆自由に自己の利益を追求せば全社會の福祉は最も良く增進する」と。それ故純然たる利己的人物を假想し、其の自由なる營利的行動とその結果とを研究したのである。是カーライルが罵倒した豚哲學である。聖書の經濟觀と相去ること西の東から遠きが如くである。

此の經濟觀は現代に於てマルクスの社會主義が繼承發展せしめた。彼は社會組織の基礎を衣食住に在りとし、之を生産する生産力の變化が社會を改造する。その上層建築なる道德宗敎文化は皆此の物的生産力の發展に從つて變化する。されば勞働者が衣食のためにする凡ての鬪爭的行動は人類に眞の自由を齎らす所以であると。

然るに輓近經濟學の趨勢は次第に聖書的經濟觀に接近しつつある。進步せる經濟學は最早社會主義又は自由主義を唱へない。社會制度でなく社會其の物の進步、物の量でなく人間の自由を唱へる。「安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられない」（マルコ傳第二章第二十七節）ことを認める。嘗てラスキンが云つた、

生命以外に富はない――愛し喜び崇ぶ力の凡てを含む生命がそれである。

富とは丈夫が有つ價値ある所有物である。

ことを否認しない。近代の英國經濟學の泰斗アルフレド・マーシャルは云ふ。

經濟學は輓近次第に人間の福祉研究の一部となつて來た。其の精神はプラトーの論語のそれに近づき、其の色々の研究方法はベーコン、ニユートン及びダーウヰンのそれに近づいたと。

思ふに現代生活の最大强敵は貧乏ではない。「貧しき者は常に汝らと偕に居れり」（ヨハネ傳第十二章第八節）である。現代の最大脅威は實に靈的貧乏に在る。今から五十年前に比べて、我等の物的生活は一變し、其の豐富になつた事は驚くべきである。電信電話ラヂオ、汽車汽船電車、電燈瓦斯石炭、活動寫眞にカフエーにバー、我らは數片の白銅貨を以て一日の娛樂に耽けることが出來る。然かも之を以て人は少しも滿足しない。他人が自分より餘計に樂しむことを憤り、自分は他人よりも餘計に樂しむことを誇り、互に嫉妬、猜疑、分離、鬪爭、掠奪、殘害をして居るのである。此の靈的貧乏の往く先は滅亡以外にない。「人の生命は、所有の豐なるに因らぬな

り」（ルカ傳第十二章第十五節）である。さらば今後此の地球を相續する者は誰か。

嘗てロマ千年に亘る大帝國の存續は決してその武力に由つたのではない。史家ニーブールの言ふ如く「矛を以て獲た土地は矛を以て失はれる。唯鋤を以て獲た土地は失はれることがない」と。「幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん」（マタイ傳第五章第五節）である。

武を以てせばユダヤ人は地上最微の民族である。彼等は周圍の民族に征服せられて一度ならず國滅び、民は他國に移され、今尙世界に四散し流浪してゐる。然かも往時の大帝國と大國民とが今や悉く跡方なく滅亡したに拘はらず、此の民族のみが尙世界的一勢力として存續して居るのは何によるか。彼等の商才によるのではない。實に彼らの信仰に因る。

英國民が今日日沒を見ない大帝國を建設したのも亦決して彼等の商才ではなかつた。由來アングロ、サクソンは決して商業的天才ではない。然るに英米兩國が世界産業界の指導者たり得たのは彼等の祖先に清教徒があつたからである。

今や時代は太平洋を圍んで世界の諸勢力が東洋に集り、互にその優越を競ひつつある。孰れの民族が將來此の地の承繼者となるであらうか。日本國民の將來や奈何。私は確信する、我が國民が此の太平洋時代に世界歴史に貢獻し、民族としての使命を完うすることを得しめるものは主イエス・キリストを信ずる信仰であると。信仰が今も昔も將來も此の地を嗣ぎ得る、是私の云ふ聖書的經濟觀である。

昭和六年四月

鎌倉扇ヶ谷の寓居にて

江原萬里

はしがき

○著者は學窓を出てから滿六年を大阪住友總本店に勤務し、後六ケ年母校なる東京帝國大學に助教授として經濟學を講ずる者となり、病のため職を辭して雜誌思想と生活、聖書之眞理を主筆すること爰に五年、本書は經濟學から聖書に向つた著者の道程を語るものである。

○本書に收錄した諸文は皆て著者の主筆するる雜誌思想と生活、東京帝國大學經濟學會發行の經濟學論集、其の他の諸雜誌に掲載したものを此度嚴重に訂正增補したものである。經濟學論集に掲載した著者の處女論文「富の增進」は增補して約二倍の頁數となつた。

○各篇の終に記載した數字は皆て發表した年月を示し、二・一とあるは昭和二年一月の意である。明治又は大正は之を明記し、又思想と生活以外の雜誌は其の名を記入した。

○本書刊行につき親友田村次郎君の勞に負ふところ甚だ大である。併せて記して感謝の意を表する。

聖書的現代經濟觀　目次

前篇　生活と思想

地を嗣ぐ者は誰ぞ……一

日本國民は何處に往く……一八

故郷歸還……二〇

一　饅の發生地　二　饅の故郷歸還　三　人類の懷郷心　四　ユダヤの歴史　五　出埃及　六　バビロニアへの捕囚　七　シオン歸還運動

運命か攝理か……四〇

一　日本は地震國　二　地震の國民生活に及ぼす禍害　三　社會的生活の地震　四　地震國の最大問題　五　現代人の神の攝理否認　六　不信の結果　七　スペンサーの告白　八　現代の頽廢と二十六個の鉛の兵隊

聖書の生存力……五五

神は愛……五七

目次

惡の存在……五九
文明の進歩と自然の復讐……六一
ガリラヤの春……六七
一 ガラリヤ湖畔　二 自然と人　三 會堂　四 神の國
唯一の眞なるもの……八七
胃の腑哲學……八九
一 食傷　二 自然療法
眞理とは何ぞ……九九
胃の腑と靈魂……一〇一
基督教的社會觀と現代社會觀……一〇三
士族の商法……一〇五
鈴木馬左也翁……一一七
平野國臣と尊攘英斷錄……一二九

一 彼の生涯　二 尊攘英斷錄　三 その人物
端午の節句……一五一
南洲だるま……一五三
ロイド・ガリソンを思ふ……一五五
高山と人物……一六二
基督者とは何者か……一六五
一 罪人　二 赦されたる罪人　三 キリストに在りて生くる者
二種の信者……一七七
福音の眞髓……一七九
我らの畢生の事業……一八一
キリストか此の世か……一八三
失業者への慰……一八五
聖潔と誇……一八七

後篇　富の增進
一　富とは何を云ふか……一八九
二　二つの反對論……二〇七
三　富の最大量……二一九
四　適者生存……二三五
五　富の增進……二四九
一　效用の增加　二　生產費の減少　三　富の將來

聖書的現代經濟觀

地を嗣ぐ者は誰ぞ

熱烈なる信仰を有つた淸敎徒の內に在つても殊に不羈獨立を以て知られた所謂分離派の一群が、故國に於ては到底信仰の自由を得られないために、何人にも煩はさるゝことなく己の良心と眞理とを以て神を拜しやうとして、千六百二十年九月六日僅か百八十噸の帆船メーフラワー號に乘つて英國プリモスを發し、北米指して大西洋にのり出てたのであつた。

見渡す限り茫洋として水又水である。大波はうねつて小船を翻弄する。船板一枚のその下は那落の深淵である。海原遠く馳りて帆に孕む風よ、汝は何處より來り何

處に往く。ああ彼等は既に遠く故國の山河と一生の別れを告げた。堅信不拔の魂よ、汝等の往く先はそも何處ぞ、それは未知の國である。幾日か太陽は水平線の彼方より出て、水平線の此方に沒した。船は只獨り洋上に漂ふのである。荒波狂ふ暴風雨の夜は萬物悉く暗黑に覆はれて無限の恐怖を示し、澄み渡りたる夜は空に無數の星斗輝き出て、永遠の希望を告ぐ。此の幾日彼等の魂はその慕ひつゝある神、畏るべき實在の實在とのみ相對したのであつた。恐らくは彼等は此の時程嚴肅敬虔の念に打たれたことは又とあるまい。かくして彼等は船中神に祈つて有名なるメーフラワー、コムパクト（誓約）を作つた。之が將來北米合衆國の憲法の淵源となつたのである。

神の御名に於て、アーメン、王、信仰の擁護者等に居ます我等の畏れかしこむ統治の君、神の御意（こころ）により大英、フランク、及び愛蘭の王たるヂエームス陛下の忠誠なる臣民なる下記の我等は、神の榮光と基督敎の信仰の增進と我等の王及び國の名譽を揚げんため、ヴーヂニアの北部に植民地を建設せんとして渡航を企てしが、今爰に嚴肅に且つ相互に、神と各自の面前に於て誓約をなし、我等のより善き秩序と前述の目的の維持增進とのため、我等を結合して一つの政治的自治團體となし、之れにより時に應じて、その植民地全般の福祉のため最適最宜と思惟せらるゝ公正平等の法律と命令と規則と組織及び職務とを實行し、制定し、構成し、且つ我等は之れに對して正當なる一切の服歸と從順とを誓約するものなり。

これが證として下に我等はその姓名を署す。

コッド岬に於て、英國、フランク及び愛蘭の第十八代、スコットランドの第五十四代の、我等の統治の君ヂエームス王の治世、紀元一千六百二十年十一月十一日。（以下四十一名署名）

彼等は海上に漂ふこと數ケ月にして十二月二十一日、吹きしきる師走の寒風を凌ぎ現今の北米合衆國マサチユセッツ州プリモスの荒磯に上陸した。同勢百人（或は

百二人)。「兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おほからず、能力ある者おほからず、貴きものおほからず」(コリント前書一章二六節)である。されど史上未だ曾てこれ程精選せられた幾組の優れた夫婦が一隊をなして一地方に植民したことはなかつた。多分今後もあるまい。實に北米合衆國の光輝ある建國史は此日から始まつたのである。然かも此の順禮父祖(ピルグリムファーザー)たちを迎へたものは愛する溫き友にあらずして、四顧茫々として人跡稀なる不毛の原野であつた。これが彼等の理想境であつた。

彼等は上陸するや自ら樹木を伐採して小屋を造りて住み、地を拓きてそれから產出する物を取りて食ひ、彼等が神の御言葉として堅く信じた聖書を讀み、故國に於て熱望した良心を以て共に心を協せて彼等の神を拜し得たのであつた。彼等は此の地に於て「嚴肅に且つ相互に」、彼等の契約による團體的規律に服從した。彼等の求めたものは地上の快樂ではなかつた。如何に義しく神と偕に歩まんか是であつた。即ち彼等の眞の國籍は地になく、天に在つたのである。遙に之を仰ぎ見つゝ、地上

幾多の困苦缺乏に耐えたのである。かゝる土地に定住した順禮父祖(ピルグリムファーザー)が信仰と勞苦との生活に於て最も愛讀したものは多分聖書に記されたイスラエルの父祖アブラハムの生涯であつたであらう。

信仰に由りてアブラハム召されしとき嗣業(しげふ)として受くべき地に出て往けとの命に遵ひ(したが)、その往く(ゆく)所を知らずして出て往けり。信仰に由り異國に在るごとく約束の地に寓(やど)り、同じ約束を嗣ぐ(つ)べきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり。これ神の營み造り給ふ基礎(もとゐ)ある都を望めばなり。

信仰によりてサラも約束したまふ者の忠實なるを思ひし故に、年邁(すぎ)たれど胤(たね)をやどす力を受けたり。この故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとく、また海邊の數へがたき砂のごとく夥多(おびただ)しく生れ出でたり。彼等はみな信仰を懷(いだ)きて死にたり。未だ約束の物を受けざりしが、遙にこれを見て迎へ、地にては旅人(ピルグリムス)また寓れる者なるを言ひ顯はせり。斯く言ふは、己が故郷を求むる

ことを表はすなり。若しその出でし處を念はば、歸るべき機ありしなるべし。されど彼らの慕ふ所は天にある更に勝りたる所なり。この故に神は彼らの神と稱へらるゝを恥とし給はず、そは彼等のために都を備へ給へばなり。（ヘブル書十一章）

若し此の順禮父祖（ピルグリムファーザー）にして故國の暖き爐邊、膏に滿ちた肉の鍋を戀ひ慕うたならば、彼等も亦歸へり來るべき機は幾らもあつた。然かも彼等は歸へらなかつた。否、彼等の內過半數は極度の困苦の爲め、上陸後數ヶ月にして遙に天つ御國を慕ひつゝ、信仰を懷きて此土に骨を埋めたのであつた。純眞にして健實、畏るべきものを畏れ、恐るべからざるものを少しも恐れざりし勇敢なる魂よ、汝等は汝等の眞の故鄉に還つたのである。我等はその故に神に感謝する。假令汝等が今數十年長生し、やがて水鼻を垂らし、眞綿にくるまり、他人から人形の如く（汚なき人形よ！）取扱はれたりとて、我等は少しもその爲めに神に感謝する理由を持たない。長生と短命とは問題ではない。如何に生きたか、又如何に死したかゞ問題である。

まことに此等堅信不拔の順禮父祖（ピルグリムファーザー）こそは、アブラハムがイスラエル民族の父祖（ファーザー）となつたやうに、北米合衆國の父祖となつたのである。試みに米國史より彼等を取去り見よ、如何に大なる空虛がそこに生ずるであらう。私はこゝにウキガム教授の「科學の十誡」中より次の記事を摘載する。私はこゝに列記せる人名を以て悉く此のピルグリム・ファーザーの子孫でありとする點につき、多少の疑問を有つ者であるが、然し兎に角注目すべき文字である。

「メーフラワー號にて渡來し、第一感謝祭の日にプリモス・ロックに上陸した順禮が百二人あつた。海外に乘り出たもので男女の遺傳的良種を得るのに之に優つたものはあるまい。今私がこれを書きつゝある時彼等の姓名全部私の机上に在る。この內過半數は數ヶ月の內に死んだ。只二十三人がその子孫を遺したことがわかつて居る。然るにその子孫はどんなものであつたか。氣紛れにその內のものを讀み上げて見よう。ジョン・アダムス（第二次大統領）、ジョン・クキンシー・アダムス

（其の長男、第六次大統領）、チヤールズ・アダムス（其の子、駐英大使、アラバマ事件に命名あり）、ジエームス・A・ガーフヰルド（第二十次大統領）、ユリセス・S・グラント（第十八次大統領）、レビ・P・モルトン（副大統領）、エリウ・ルート（滿鐵中立問題にて我國に有名）、タフト（第二十七次大統領）、ザカリー・テーラー（第十二次大統領）、ダニエル・ウエブスター（大雄辯家）、レオナルド・ウッヅ將軍（昨年死去のフヰリツピン總督）、ラルフ・エマソン、ヘンリー・ワヅワース、ロングフエロー、ウヰリアム・カレン・ブライアント、フランク・マンセー、ペルシ・マッケー、ウヰンストン・チヤーチル（以上文士詩人）。彼等の上陸したのは三百年前であつた。彼等は數千人に增殖した。」

尙此の外此地から出た學者にはジョナサン・エドワーヅ父子の如き大神學者あり、ジョン・ウヰンスロップの如き權威ある歷史家あり、其他歷史家にモットレーあり、詩人にホヰチヤー、ロウエルあり、文士にホーソンとストー夫人とあり、社會改良家にロイド・ガリソンあり。我等は新英州の歷史を讀んで、如何に信仰を持つて死せしものゝ子孫が此の地を嗣ぐかを明に知る事が出來るのである。彼等は地上の榮華を求めず天國を慕つた。彼等の根據は聖書にあつて現世的知識なる科學ではなかつた。彼等の重んじたものは信仰であつて事業ではなかつた。然かも「地にありては旅人（ピルグリム）、宿れる者」と云つた彼等がかくも鮮に其の足跡を地上に印したのであつた。彼等の聖書は云ふ。

今より後主に在りて死ぬる死人は幸福なり。御靈も言ひ給ふ。然り、彼等はその勞役（ろうえき）を止めて息まん。その業これに隨ふなり。（ヨハネ默示錄十四章）と

實に北米合衆國はかゝる人達により建てられた國であつた。ミシシピ河の流れて兩岸の平野を灌ぼす所、ヒューロン、ミシガン、シューペリオ湖の碧水のたゝゆる處、ロッキー山脈の高く天に聳ゆる處、廣袤三百萬方哩、その天然の資源の豐富なること世界第一である。そして此の地を嗣いだものはかの信仰を懷いて死んだ者の子孫であつた。米國はその富に於て世界何れの國も之に勝るものはない。地上若し

天國に近いものがあらば、それは北米合衆國であると哲學者ラッセルは言ふ。然れども今や此の米國は一變した。彼等は富めば富むだけ、彼等の最大關心事は如何にして此の富を維持增進せんかに在つて、此の天惠豐かなる地を彼等に遺產として遺した彼等の父祖が宇宙最大の書として聖書に學んで得た信仰は次第に衰へつゝある。今では彼等の神は聖書の神ではない。マンモンである。彼等の豫言者はイザヤにあらず、エレミヤにあらず、パウロでない。幾多の生物學者又は死物學者、その說を基礎とする社會學者、又はその說により他人種を排斥せんとする反社會學者である。此等の豫言者は云ふ。

「我等は優越せる人種である。此の優越は我等の文明に負ふ處のものである。そして我等の文明は我等の優越せる血（Germ plasm）によるものである。今や此の血は消滅の危險に瀕して居る。されば此の文明を維持せんとせば、我等は劣弱の人民と戰ひ、爭ひ、反對し、之を枯し盡さねばならない」と。

（ヂャパン、タイムス一月五日記事、「人種的堤防の危險」より。近時問題となつたカナダに於ける排日の當局者判事又は反事グランド氏の放言も之と同じ。）

最も大切なるは優良人種の體質の保存とその遺傳であると云ふ。これが地を嗣ぎ得る最大の要件であるとの事である。かくて彼等の誇稱する世界第一の富と而して東洋人排斥法とがあるのである。然れども彼等の祖先はかく云はないのである。彼等は何よりも聖書に據つた。聖書は何と云ふか。

然らば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと云はんか。アブラハム若し行爲によりて義とせられたらんには誇るべき所あり。然れど神の前には有ることなし。聖書に何と云へるか「アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり」と。（ロマ書四章）

肉につきては何を得たりと云はんか。神の前にはあることなしと。優秀民族の血につきては何を得たりと云はんか。その「遺傳的天才」につきて何を得たりと云は

んか。神の前にはあることなしてある。アブラハム神を信ず、その信仰を義とせられたりてある。見ゆるものゝ上に立つ科學的知識、又事業、又は自己の品性は神の前に何の得る處なし、只聖書により神が我等に約束し給ふその恩惠を疑はずして信受すること、卽ちキリストを信ずる信仰のみが神と義しき關係に立ち得るのてある。彼等の祖先はアブラハムと同じく「見ゆる處によらず、信仰によつて歩んだ」のてある。そしてその信仰により義とせられ、その信仰によりその地を嗣ぎ得たのてある。

アブラハムがその神エホバの命により、メソポタニアの平原、物質豐なるウルの地から遠く地中海の東岸カナンの地、卽ち今のパレスチナ地方に移住した時、彼は宛も順禮父祖が故國英國を出て、大西洋の波濤を越えて遠く北米の野に移住したのと同じてあつた。それは滿目荒凉として人跡絶え、晴れたる夜はオライオンが蒼空を濶歩するのみてあつた。神は彼に云ひ給ふた。「なんぢ目を擧げてなんぢの居る處より西東北南をのぞめ。凡そ汝が觀る所の地は我之を永くなんぢとなんぢの裔とに與ふべし」と（創世紀十三章）。又神は或る夜彼を天幕の外を携え出し、澄み渡りたる大空を仰がしめて、「なんぢ天を望みて星を數え得るかを見よ。なんぢの子孫はかくの如くなるべし」と告げ給ふた（十五章）。

當時アブラハムは年進みて百歳に垂んとし、その妻サラも亦懷姙し得べき時期をとくの昔に過ぎて居たのてある。然かも彼は彼の有せる科學的知識に執はれることなく、以て神の啓示を疑はなかつた。「アブラハム、エホバを信ず。エホバこれを彼の義となし給へり」（十五章）てある。やがて誠實なるエホバの約束は實現し、サラはイサクを生んだ。此の子とそれから出る子孫こそは彼の希望、彼の生命てあつた。然るにアブラハムはこの獨子イサクをも神の命なりと信じて之を燔祭として神に獻げやうとしたのてある。彼にとつては彼の一身、彼の財産、彼の希望、彼れが生命の如く愛するものと雖も彼の神の前には悉く之を獻げたのてある。彼には唯神のみ

があつた。己は全くなかつた。彼は此の信仰により義とせられたのである。されば神は云ひ給ふた。

我己を指して誓ふ、汝是事を爲し汝の子卽ち汝の獨子を惜しまざりしに因りて、我大に汝を祝み、又大に汝の子孫を增して空の星の如く濱の砂の如くならしむべし。汝の子孫は敵の門を獲らん。又汝の子孫によりて天下の民皆福祉を得べし。汝わが言に遵ひたるによりてなり」と(二十二章)。

これがアブラハムの信仰であつた。此の信仰によつて數千年の後今尙存續するユダヤ民族は生じたのであつた。彼等は肉によつて之を得たのではなかつた。神の言、神御自身を其儘に受け入れたからであつた。たゞそれだけであつたのである。

洵に「世に勝たしむるは我等の信なり」(ヨハネ第一書五章)である。或は窮迫して江湖に流浪し、身に食ひ入る困苦缺乏の內に在り、或は心は熱すれども肉體よわくして、無理强ゐの怠惰の捕虜となり、嘲けるものは四方より、「なんぢの神は何處に在りや」と云ふ時、尙神の救を確信して動かず、ダンバーの戰に臨みしクロムウエルの如く、「戰ひ利あらず、兵馬慘として人皆生色なきの時、希望は火の柱の如く彼の內に輝く」のである。これ生ける神を信ずることから生ずる希望である。アブラハムは此の神を信じて義とせられ、順禮父祖も亦此の神を信じて北米合衆國の父祖となつた。聖書は我等に告げて云ふ。神は此の地球をアブラハムとその裔に與へ給ふと。裔とは誰か。彼の肉體より出てし子孫であるか。否、地を嗣ぐものは優秀人種の血ではない。產兒制限でもない。優生運動でもない。アブラハムと同じ信仰を有するものである。聖書は云ふ。

この故に世嗣たることの恩惠に干らん爲めに信仰に由るなり。是かの約束のアブラハムの凡ての裔、すなはち律法による裔のみならず、彼の信仰に效ふ裔にも堅うせられん爲なり。彼はその信じたる所の神、すなはち死人を活し、無きものを有るものゝ如く呼び給ふ神の前にて我等すべての者の父たるなり。錄して「我汝

を立てゝ多くの國人の父とせり」とあるが如し。彼は望むべくもあらぬ時になほ望みて信じたり。（ロマ書四章）

然り、地を嗣ぐ者はアブラハムの信じた神を信ずる者である。そもアブラハムの信じた神は如何なる神であつたか。それは黄金の神でもなかつた。彼等は之を偶像とし虚偽として排けた。彼の神は「死人を活し、無きものを有るものゝ如く呼び給ふ神」即ち宇宙萬物を無きものより呼び出し、又死者に生を與ふる神であつた。創造、復活の神であつた。

斯く「義と認められたり」と錄したるは、アブラハムの爲のみならず、また我らの爲なり。我らの主イエスを死人の中より甦らせ給ひし者を信ずる我らも、その信仰を義と認められん。主は我等の罪のために付され、我らの義とせられん爲に甦へらせられ給へるなり。（ロマ書四章）

イエスを死人の中から甦らせ給うた神を信じて義とせらるゝのである。彼は人類が神に離反したその罪から我等を解放し、之に眞の神を示し給うたのである。我等はイエス・キリストに在りて生き、キリストの顯はし給ふ父なる神と義しき關係に立ち得てかかる大なる恩惠に與るのである。

我が日本國民にして今後此の地を嗣ぎ、人類の進歩に偉大なる貢獻を爲し得る時あらば、そは此の國民が此の信仰を有つ時である。この信仰のみ我等を確實なる宇宙の事實の上に立たしめる。その國の天然の資源、皮膚の色、民族的素質、國民性、これ等は何等神の前には誇る所あるなし。神は既にその偉大なる救の御手を我國に伸べ給ひつゝあるのを見る。富士の白雪旭光に輝く處、太平洋の暖流來つて岸を洗ふの邊、大なる榮光の揚るのを我らは期して待ち、鶴首して之を望む。遮莫、洋の彼方に移民制限法と云ふ砂の堤防を設けて、大海の浩波を防ぎ得べしと思ふ愚者よ、汝はやがて恥ぢるであらう。（三、二）

日本國民は何處に往く

曩日、某雜誌に「日本は何處に往く」と題して、諸家の之に關する意見を載せたのを見た。然るにその意見の多くは「日本は何處にも往かない」と云ふにあつて、僅に何處に往くかの問に答へたものも「往く處に往く」と云ふだけであつた。これでは答になつて居ない。

成程日本の國は何處にも往くまい。然れど日本國民はそうでない。凡そ沈滯不動は死の徴にして、活動變化は生の徴候である。日本國民は生きて活動して居る。決してぢつとしては居ないのである。何處にか往きつつある。宛も樹木が根から養分を採り、天を指して生々發展しつゝある如く、何をか指して展び進みつゝある。テニスンが「個人は衰微す、されど世界は增大す」と歌つたやうに、日本國民もその民族としての生存目的に種々の手段を適合せしめつゝあり、かくて諸班の社會的制

度は不斷に變化して已まない。

否、曾にそれ計りではない。その目的自身がその天職の自覺に伴つて次第に進化し向上し、唯一の大なる宇宙的目的に一致しつつある。同じ詩人は歌つて言ふ、

我れは疑はず、代々に亘りて
いよゝ榮ゆる一つの目的の存するを

之れある故に宛も諸星太陽の周圍を回轉しつゝ、太陽自身此等の諸星を率ゐて何處にか進みつゝある如く、日本國民が經驗して居る種々の社會的變化の其の奥底に在つてその生存目的自身が向上しつつあるのである。さらば日本國民は何處に往く。

私は確信する。日本國民は遂に基督者となると。それは甚だ大膽なる斷言である。されど福音の何たるかを知りて私はかく言はざるを得ないのである。(三、二)

故郷歸還

一　鰻の發生地

鰻は魚類の中ても其の性遲鈍てあつて、そこに何等理知の働の片影だにも認めることを得ない。然かもその行動には現代の發達した科學を以てしても之を理解するに苦しむ玄妙なるものがある。彼は河水に棲息するが其の産卵は必ず海てする習性を有するものてある。然れども其の産卵は淺い海ては決してしない。少なくとも海面以下二千尺以上の深い海の底てあることを要する。何故その必要があるかは明瞭てはないが、多分卵巣内の卵の發達には或る程度以上の水壓が必要てある爲めらしい。これが爲めに、歐洲諸國に棲息する鰻の産卵する場所はその大陸に近い地中海や、バルチック海や、イギリス海てはなく、必らずアイルランドの西南、大西洋の深底てある。こゝが彼等の生れ出づる故郷なのてある。此の事はロッキー山以東のアメリカ合衆國の鰻についても同樣てある。若し此等につき詳細に知り度き人には、最近ではシュミット博士の論文「鰻の生育地」及「鰻の分布」がその權威てある。然し乍ら極く最近まて、鰻の産卵から孵化までの狀態は誰にも明てなかつた。何人もこれまて鰻の卵を見たものはなかつた。

然るに私は最近、ある英字新聞て、大洋測量船アークチュラス號が、一昨々年卽ち一千九百二十五年、ベルムダの西南の沖合約十里、所謂チャレンヂ斷崖と稱せられ、約八千尺に及ぶ深海を取圍む絶壁の上端、海面下二千二百尺の處に於て、長さ約一寸程の鰻の卵四個を獲たとの記事を發見して喜びに堪えなかつた。其の昔、プラトーンは人類の理想境として嘗て存在し、後海底深く沈沒したと云はれる大陸アトランチスのことを說いた。かゝる大陸が存在したと言ふことは傳說として歐洲各國に古くから傳はつて居て、中世、文運復興によつてプラトーン研究が盛となるや、此のアトランチスの所在は何處かの問題は多くの學者の興味を惹いた。或る者は之

を今のアメリカであるとし、或る者はユダヤ人の故國、今のパレスチナであるとした。然れども多數のものは之を大西洋の海底（アトランチック・オーシヨン）に求めて、嘗て此の大洋を横斷して歐洲と北アメリカとを連結したものと思はれる陸橋の一斷片、卽ち此の度鰻の卵を發見したチャレンヂ斷崖の附近がそのアトランチスであるとした。古人の夢想した人類の理想境は今や歐洲及び北米の鰻の故郷であることがわかつたのである。

二　鰻の故郷歸還

こゝから生れ出た鰻の幼魚は其の始めは無色透明であつて、只眼ばかりが黑點を有する二三寸位の扁平體となつて海面に浮游し、次第に海岸に近づく頃には棒狀となる。約二年半を經た後、春尙淺き頃、此の幼魚は群をなして河水を遡るのを見る。元來鰻は老弱を問はず長時間水を離れ陸上に居ることが出來るので、彼等は夜中露草滋き處、又は雨の日には遠く陸上を旅行し得るものである。されば北歐のバルチック海の東岸では河水を遡ること實に數千哩に及び、人里遠きロシアの山奥にまでも達し、そこに安住の棲家を求めて數年を送るのである。

されど彼等は淡水に在つては決して生殖しない。それ故七八年もそこに居た後、彼等は明狀し難い不安焦慮に襲はれる。何物かを求めつゝ然かもそれが何物であるかを知らない。此の焦慮は彼等を驅つて長年棲みなれた地を離れしめ、嘗て遡り來た河流を再び下つて海に出させる。此の旅行中、彼等の眼は擴大し、身には銀色の婚禮服を纏ふのである。海に出た彼等はそこでも安住の地を得ずして、遂に彼等が數年前生れた故郷である大西洋の深淵に歸還し、そこで產卵し、海底深く沈んでゐるかのプラトーンの理想境に骨を埋めるのである。北アメリカ州の鰻も亦同じく此處に歸來して其の命を終ふること歐洲の鰻と異る處はない。

洵に玄妙なるは鰻の故郷歸還である。魚類中でも魯鈍な鰻の生涯にすらかゝる奇しき力が其の內に働くのを見れば、此の宇宙其の物、又そこに在る一物と雖も大なる驚異ならざるものはない。鰻の此の行動は洵に不可解である。生物學は僅に

J・A・トムソン教授をして「動物は一般に子孫を得る爲め、其の生地に歸還するものである」と云ふに止めしめ、それ以上何の説明をも與へ得ない。（同氏著、科學入門、科學と哲學の章參照）

若し内村先生の「天然詩人としてのエレミヤ」を讀んだ者は知つて居るであらう。かの水鳥が寒光斜に射るシベリヤの曠野、北氷洋岸に繁茂する葦荻の中に巣立ち、秋立ち初むる頃、太陽を慕うてゴビの砂漠を横斷し、アルタイ、ヒマラヤの嶮を越えて南印度の叢林に三冬の寒を避け、春風と共に再びそこを去つて生地に歸還すること春秋二回、數千哩の大空を旅行するに少しも時を違えず、又行方を迷はない。北米のウアーヅウアースと稱へられる天然詩人ブライアントは彼の名詩「水鳥に寄す」に歌つて曰く、

かの道なき水際に沿ひ
荒漠無限の空を通じて
汝を導く一つの力あり
汝は獨り彷徨ひて然かも迷はず
帶より帶、極より極
無涯の空を通じて確實に汝を導く者は
我が獨り歩む長途にても
正しく我が足を導き給はん

（畔上氏譯による）

三　人類の懷郷心

此の如く水鳥や、其の他雁や、燕の如き所謂候鳥も亦、故郷歸還の奇しき本能を有して居る。啻にそれのみではない。人類にも亦故郷を慕ふ本能がある。ふるさと遠く離れて、天涯萬里の異境に植民したものが、月光の下ホーム、スキート、ホームの民謠を聞きて、慄然として懷郷の念に堪えないのはそれである。九月九日望郷

臺上、鴻雁の北地より歸來するを見て、轉た南中の苦を嘆ずるのもそれてある。否、我等の靈魂も亦、其の故郷なる天つ御國を戀慕ふ本能を有するものてある。聖オーガスチンが、「なんぢ、我等をなんぢに至るやう造り給へり。されば我等の心はなんぢの内に憩ふまては憩を得ることなし」と其の告白錄に言ふたのは、此の事を言ひ顯はして甚だ有名てある。されはユダヤの預言者エレミヤは其の國民の神に對する背信離反を責めて言つた。

大空の鶴は其の定期を知り、
斑鳩と燕とは其の來る時を知る。
されど我が民は知らず、
エホバの御前に生くるならはしを。（エレミヤ記八章七節）

天空の鶴も雁も鳩も燕も、然り水に住む鰻すらも其の内に働く或る力に導かれて、其の故郷に還へり來るのてある。然るにイスラエルの民は其の心に植えつけられた本能により、生命の源なる神を求め、神に還へることをしないと慨嘆したのてある。然るに此の民族が其の故國を離れて他郷に流浪しては一度ならず再三、其の故國に歸還し又しやうとして居る事實は鰻のそれより遙に宇宙的驚異といはねばならない。

四　ユダヤの歴史

彼等の歴史は今より大凡四千二百年前、其の祖先アブラハムがメソポタニアの平原、カルデヤのウルの地を立ち出てゝ現在のパレスチナ地方に移住した時から始まる。アブラハムの此の移住は其の民族の神エホバの約束によつたものてある。創世記十二章は錄して

汝の國を出て、汝の親族と別れ、汝の家を離れて、我が汝に示さん其地に至れ。我れ汝を大なる國民となし、汝を祝し、汝の名を大ならしめん。……天下の諸宗族汝によりて福祉を獲ん。

かくてアブラハム時に七十五歳、「其往く處を知らずして出て往き」遂にエホバの示し給ふ異境に留まつて其の一生を終つたのである。之れがイスラエルの光榮ある又光榮なき歴史の始めである。彼等の歴史は世にも稀なる不斷の受難史であつた。彼等の故國なる現在のパレスチナ地方は、古來一方にはバビロン、アッシリヤ、ペルシャの西方進出あり、他方エヂプト、ギリシヤ、ローマの東略あり、此間に介在して、此の地は宛も蹴毬のやうに、周圍の諸國の消長により一方より他方に蹴り飛ばされ、或はエヂプト起りて之を南より蹴れば、バビロン勃興して之を北より蹴り、ペルシャ新に起りて之を東より蹴れば、ギリシヤの歴山大王とローマのシーザーは之を西より蹴つた。國は荒されて寧日なく、其の民族は宛も葡萄酒の如く或はエヂプトなるナイル河畔に注ぎ入れられ、或はバビロンの捕囚となり、チグリス・エウフラテの河畔に注ぎ入れられた。遂に紀元七十年の頃、ローマのベスパシアン及チタス帝の時國滅され、其の民は故郷を追はれ諸國に流浪して今日に至つたのである。

然かもかゝる殘虐なる命運に彌弄せられ乍ら、彼等は未だ一度だに其の民族獨自の特色を失はない。彼等は何時も又何處にてもユダヤ人であつて、如何なる國に在つても獨自の言語を有し、獨自の風俗習慣を維持して少しも他に同化しやうとしない。彼等の國を圍んで榮え、彼等を奴隷として虐遇した古への大帝國バビロン、アッシリヤ、エヂプト等の諸民族今何處に在るか。現代に於て此等のもの毫も昔の面影なきに、此の被壓の民族だけが今も尙地上に獨立の存在を有するのみか、或は學問に、或は藝術に、或は經濟に、或は政治に隠然世界人類の歴史を動かしつゝあるのは眞に奇てはあるまいか。然かも此の民族は古來幾度か其の故國なるパレスチナを追はれ、幾度か復之に歸還し、現代に於て我等は再び其の歸還の運動を見つゝあるのである。彼等の歴史を通觀して、我等は現今世に行はるゝ史觀を以てしては到底説明し得ざる奇しき力が此の民族の内に働いて居るのを見るのである。

ユダヤ人の故國歸還の歴史中最も顯著なるものゝ第一は今から大凡三千二百年前、モーセに率ゐられてエヂプトから歸つて來たことである。第二はペルシヤ王クロスによつてバビロンの捕囚から釋放されて歸還して國を再建したことである。第三は此度の世界大戰の際所謂バルフオアー宣言によるユダヤ人の「ホーム」建設之である。

五　出埃及

建國の祖アブラハムの孫イサクの時、其の國に饑饉があつたため人々難をエヂプトに避けてこゝに數代を過した。其始めはそこで歡迎せられたが、やがて此の移住民の子孫の增加率が甚大であつて、「彌々增殖し、甚しく大に强く國に滿つ」るに及び、且つ彼等の機智遙にエヂプト人に優れたために大に怖れられ、迫害せられるやうになつた。ユダヤ人の歐洲各國内での歴史も亦此の經過をとる、卽ち始めは歡迎である。後無關心となる。やがて迫害に變ると「ユダヤ人問題」の著者ベーロック氏が云ふ如く、エヂプトに於ける彼等は次第に逆遇せられ、奴隷として重き荷を負はせられて日々勞役に從事せしめられ、又其の產兒には苛酷なる制限が加へられた。如何にして此の搾取抑壓から脫出し得べきか。彼等は無力であつて己の力によつて脫出することは到底不可能であつた。彼等は唯天に向つて呻き叫んだ。

あゝ虐げられて告ぐる處なき民よ、饑と裸に泣く一切の者よ、汝等が痛苦と困窮との奥底より叫ぶ其の呻きは、只澄み渡りたる青空に空しく響くのみであつて、そこから何の答もないものであらうか。然らず、天は其の聲を聞く。出埃及記の記事は甚だ感銘深くある。

イスラエルの子孫その勞役の故によりて歎き號ぶに、勞役の故によりて號ぶところの聲神に達りければ、神その長呻を聞き、神、そのアブラハム、イサク、ヤコブになしたる契約を憶え、神、イスラエルの子孫を眷み、神、知ろしめし給へり。

神、神、神、實に此の民をして壓制と暴虐とから救出して「蜜と乳との流るゝ」其の故國に歸來せしめ給ひし者は彼等の神であつた。神は彼等の中からモーセを起し、此の大事業を爲さしめ給ふたのである。三千餘年の今日、彼等の子孫は今尙此、超自然的救出を記念しつゝある。彼等の最大祝節たる過越の節はそれである。

六　バビロニアへの捕囚

第二の故國歸還はそれから約六百年後に生じた。エヂプトから歸來した此の民は一時ダビデ王の下に勢威四隣に輝いたが、其の子ソロモン王の死後國勢地に墜ち、國は二分してイスラエル及びユダの二國となつた。爾來偉大なる預言者が出て國民に警告を與へたが衰勢日に加はり、或は南方エヂプトの勢に服し、或は北方新興のアッシリア、バビロンに制せられた。イスラエル國先づ滅び、ユダ亦紀元前六百年の頃バビロン王ネブカドネザルの爲めに首都エルサレムを陷られ、國民生活の中心なる神殿は破壞され、其の民の精良は悉くバビロンにつれてゆかれた。國破山河在。

然かも山河は荒蕪に委せられ、他國人來つて住むに任された。哀歌に

あゝ哀しいかな、古昔は人のみちたりし此の都邑、
いまは凄しき樣にて坐し、寡婦の如くになれり。
ユダは艱難の故により、また大なる苦役のゆえにより
虜はれゆき、もろ〳〵の國に住ひて安息を得ず。
シオンの道路は節會に上り來るものなき爲め哀しみ
その門は悉荒れ、その祭司は歎き、
その處女は憂え、シオンも亦自ら苦しむ。

然るにこの事ありてより約六十年、捕囚となりてユダの山地からチグリス、エウフラテスの平野、楊柳流に沿うて岸に垂るゝ邊に伴ひゆかれた者は殆ど皆死んで其の子孫の世となつた頃、さしもに强大であつたバビロンの國運も「數へられ秤られ分れて」遂にペルシヤに滅され、ペルシヤ王クロスの大赦によつてユダヤ人は再び

其の故國に歸還した。「ユダヤ教」の著者エフライム博士は之につきかく云ふ。

「彼等は再び國を建てることに成功した。此の事は史上、他國民に其の例を見ない顯著な現象である。然かも彼等が此の事を成したのは、彼等が只單に一個の國民であると云ふよりも更に何物かである事實に因るものである。彼等は一つの觀念により團結せしめられた宗教團體であつて、彼等を國民と言ふのは其の一つの言ひ現はし方に過ぎない。」と

然り、若し彼等が單純に一國民と云ふだけのものであつたならば、六十餘年の永い間他國に移植せられた彼等はとつくの昔四散し又は他國民に同化して最早地上其の跡を留め得なかつたであらう。一つの國土に共に住むと云ふ事は多くの家族と種族とを一つの民族として團結せしめ、一國民として永續せしむる最大の要件である。此の國土を共にする間は假令其の國衰へ、其の民墮落し、他國の制壓を受けても、時運に際會せば再び勃興し其の大を爲すこともあり得る。然るに一度その國土を失ひ他國に流浪し、此の國民的結合の最大の絆が斷たれた時には、果して何の國民が永く其の國民性を維持し得るであらうか。次第に周圍の人々の内に沒入し、之れと共に別の民族と爲るであらう。又若し一團となつて遠地に移住しても、例へば北米合衆國民のやうに數代を經ない内に早くも故國の傳統は失せ、親近の情は薄らぎ、やがて彼等の境遇は兩者をして別人の如くに思はしむるであらう。これが普通である。

只こゝに一つの民族があつた。其の永き流囚の間にも依然として其の民族としての特徴を失はず、遠く故國を離るゝも依然故國を慕ふの情濃かであつて、兩地に住むものはいつも互に同胞としての感じを失はなかつた。實に此の内に超自然的力が働き、彼等を救うて一定の方向に導きつゝあるのを觀る。彼等の歴史は有力なるその證明者である。

七　シオン歸還運動

第三の故國歸還の運動は我等之を眼の當りに觀て居る。ユダヤ人がバビロンの流囚から故國に還つて再び國を建てゝより約七百年、ナザレのイエス現はれ神の國の福音を說き、自らキリスト卽ち救主と稱するの故を以て十字架上に死し給ふてより三十餘年、大なる災禍はローマ帝ベスパシアンの子チタスによつて此の民族の上に加へられた。其の當時の目擊者ヨセーフスの記事によれば、チタスのエルサレムを圍んだ時は宛もユダヤ人の最大祝節である過越の節を祝はんとてユダヤ人が各地から此の首都に集り來たもの多數に上り、此等の中或は劍により或は餓により死んだ者は百三十五萬餘人、捕虜となり奴隷に賣られた者十餘萬人に及んだとのことである。宮の敷石の上は殺戮の爲め流血滾々として小河となつたとある。其の後紀元百三十二年、ハドリアン帝の時ユダヤ人は再び反亂して鎭壓せられ、遂に五十餘萬の殘存ユダヤ人は悉く其の國を追はれて世界の各地に流浪すること千八百餘年を經た今日に至つたのである。

故國を追れた彼等は一時スペインに集りこゝて繁榮したが、コロムブスが米國を發見した頃、其の國の宗敎裁判によつて迫害虐殺相次ぎ、彼等は悉くこゝを追はれた。それ以來ポーランドは暫時彼等の避難所であつたが、此の國が普墺露の三國に國土を分割された後は露國の彼等に對する迫害は言語に絕した。彼等は世界の何處に往くも安住の地を得ず、迫害は其の跡を追つたのである。詩人ハイネは歌つて云つた「ユダヤ人よ、なんぢの名は不運である」と。彼等の不幸は彼等が何處に往つてもユダヤ人たるの誇を捨てないからである。世界各國の同化政策は悉く失敗であつた。而して現代では如何に此のユダヤ人を取扱ふかは世界最大の問題の一つとなつて居るのである。然るに此度の大戰に於て、一千九百十七年アレンビー將軍の率ゆる一隊がエルサレムに入城し、永き間土耳古の支配下に在つたユダヤ人の故國パレスチナ地方が基督敎國民の手中に歸し、又所謂バルフオアー宣言が發せられ、ヴエルサイユの平和會議で各國皆ユダヤ人のホームを作ることに同意したのである。

今や舊世界三大陸を接合して扇の要の如き此の地方、此度の世界大戰の有力なる遠因となつた伯林バクダット鐵道がここを通過して、世界最大の油田の存在するメソポタニア平原を經てペルシヤ灣に出てやうとする處、アフリカ縱貫鐵道が南阿ケープタウンよりエヂプトに出て、スエズ運河を越えて此の地に連ならうとし、更に將來亞細亞幹線鐵道が此の地から起つてペルシヤ、印度を經て支那に出て直ちにシベリア鐵道に連絡しやうとする處、こゝにユダヤ人は歸還しつつある。

現今世界各國に散在するユダヤ人の數は約千五百萬人位であるが、恐らくは彼等程世界的人物を多數輩出し、今尙隱然世界の大勢力たるものはあるまい。世界の金融が彼等の勢力下に在ることは何人も知る處である。世界の通信機關も亦彼等の支配下に在る。其の最も有名なのはかのロイテルであつた。ユダヤ人であつて獨逸にありて最よく國民の心を歌つた詩人はハイネであつた。和蘭に在つて世界に大思想を供したものは哲學者スピノーザであつた。伊太利建國の預言者と稱せられたマヂニーも亦ユダヤ人であつた。英國に於てグラッドストンと相對して聲名あつた政治家ヂスレエリーも亦ユダヤ人であつた。今や露國に在りてソビエットの幹部は悉くユダヤ人と云ひて可なりである。

云ふ勿れ、世界は勞働と資本との二大陣營に分れつゝありと、此の兩陣營を指導する者は誰か。皆ユダヤ人ではないか。彼等は物質的に世界の雄たると同時に精神的にも亦天才である。彼等の固持せるユダヤ敎からして世界的宗敎キリスト敎は出てたのである。彼等は彼等の內に働く見えざる力に導かれつゝ、今まで屢々其の故國に歸還し又今しつゝあるのを見る。此の事は鰻の故郷歸還よりも更に世界の驚異である。あに啻にそれのみでない、私は自然と人類の歷史とを觀て、萬物とその冠なる人類の中に「常に增進しつゝある一の目的」あり、宇宙萬物悉く未だ知られないその靈の故郷にまで歸還しつゝあることを思ふ者である。（三、三）

運命か攝理か

一　日本は地震國

我が國の前途に幾多の深き憂がある。スエズ運河の開鑿とシベリア鐵道の敷設と更らにパナマ運河の開鑿とありて西洋は直ちに東洋と連續し、其の内に包藏せられた諸勢力は滔々として亞細亞に寄せ來り、將來の禍亂はこゝに醞釀醱酵されつゝある。印度は動き、支那は騷ぎ、太平洋とは名のみにして浩波は來るべき旋風に龍卷を起さんず形勢がある。

此の内にあつて日本國民の前途は容易てはない。朝鮮は大陸に接續し、臺灣は洋上遙か彼方に在る。加之、大和民族の根據たる秋津島根は大陸を緣とる細長き小島に過ぎない。全島の大部分は山てあつて耕地は僅少てある。水産物を除いて天産の誇るべきものは何物もない。而して人口は内地に於て六千萬人に達し、年々七八十萬人の增加を見つゝある。人は多くして之を容るゝ地は狹い。今後民族を養ふ食糧を如何にして得るかは大問題てある。

否、そればかりてはない。此の民族の據つて以つて立つて居る地盤その物が堅固なるものてはない。これは大古地殼の變動により海中から隆起したものてあつて地震の作つたものてある。奥羽地方の東岸を去ること餘り遠からざる海中に數萬尺に及ぶ斷崖絶壁がある。其の下に世界て一二を爭ふ深淵が横はる。永遠の暗黑と靜寂とがこゝを領してゐる。若し一度此の斷崖に異變のあらんか、これ大八州國に大變動の來る時てある。去る三月七日奥丹後地方の地震の激しさは地殼震動の極點に達したとの事てある。大正十二年の關東大震火災以來頻々として生ずる大地震は確に國民の將來に對する最大深憂の一てある。

二　地震の國民生活に及ぼす禍害

地震が國民生活を脅すことは地震そのものによるばかりてはない。いつ地震が生

ずるかも知れないとの危惧の方が更らに大なる影響を與へるのてある。地震そのものの禍害の大なることは關東地方の大震火災によつて明瞭てある。今一度かゝる大天災が我國に臨まんか、想像するだに戰慄を禁じ得ないてはないか。然し此の危惧から生ずる國民生活の活動力の減殺はそれよりももつと大きな禍害てある。

我國に於て國富が異常に發達し來たのは明治以來の事てある。世界各國に於ても十八世紀の後年、寧ろ十九世紀以來、鐵道、運河、船舶、電信、電話、水道、瓦斯、印刷、其他の工場が續出して以て今日の異常なる經濟的活動を見るに至つたのてある。此等の富は自然に生じたのてはない。又一時に生じたのてもない。永い間、人々が刻苦勉勵して現代に遺した財產てある。此の遺產を現代に於て消盡することなく、更らに增し加へて之を後代に遺す處に社會の進步があり、福祉の增進がある。

此の富の蓄積は人が現在の爲めに働かず、遠き將來の爲めに働く時生ずる。人が將來の準備を爲すには社會の狀態が安定てあつて、大なる變動の生ずる惧なき事を要する。若し戰亂が頻〻として起り、又政府が苛斂誅求を爲す時は人は勞働しやうとせず、又其の勞働して得た處のものを直ちに消費し、之を將來の用に充てる爲めに蓄積しない。朝鮮が併合以前の狀態は正に之てあつた。其の社會の發達を阻害したものにして虎よりも猛き誅求の如きはなかつた。地震の惧る可きも亦之に類する。又地震が起りはせずやとの危惧は人をして知らず知らず將來に對する活動をにぶらすものてある。日本國民の發展上地震が由々しき大問題なるは之が爲てある。

三　社會的生活の地震

如何に地震が國民的活動を妨げるかにつき今少し考へて見度い。現代に於ては人が營々として生活の爲めに働くも、殆んど皆自己及家族の用に充てるものを作つて居るのてはない。人は各々他人の用を充す爲に働いて居るのてある。「アダムは土掘り、エバは紡ぐ」。アダムがよく終日耕作に專心し得るのは、エバが紡ぎて衣服を調達してくれるからてある。エバが終日紡ぐのみて生活し得るのは、アダムがよく

エバの分をも耕してくれるからてある。

異常に發達せる現代の經濟生活に於て、各人の爲す處の仕事はその生活用品生產の全仕事の甚僅少なる一部分に過ぎない。然も各人が生活を厚くし、廣くし得るは、社會に一定の秩序があり、各人が終日終年自己に定められた一少部分の仕事にのみ沒頭するも、尙よく相互に有無相補ひ得て生活し得るからてある。例へば米國や印度の農夫が毎年安じて多量の棉花を栽培し得るのは、我國からもいつもの通り之を買つてくれるとの信頼があるからてある。我國の棉花商が之を買ひ得るのは之を紡いて得た綿糸、綿布が自國民全體の用に充て、又他國民の用にも充て得る見込があるからてある。印度や北米の農夫と、我國民や支那國民中衣服を需要する者との間に何等の面識あるなく、相互に知る處はない。然もこれ等は一つの密接なる關係を有し、人類の社會生活は世界大の有機體を作りて相互に相依り相頼みて各自その分を盡しつゝある。之れ一つに社會の秩序に對する信頼があるからてある。

此の信頼あつて始めて各人は安じて其の業を勵み、又將來の爲めに大なる計畫を立て得る。一度此の信頼にして戰亂の爲め、或は恐慌の爲め破れんか、全體の活動は萎靡遲緩し、多數の者が路頭に迷ふに至るのてある。されば人類の活動は實に此の社會的信用の基礎の上に於て爲されつゝありと云ひ得る。

此の社會的信用は各人の性格の向上、公の秩序の確立、兵備、經濟組織の完成、貨幣制度の確立等により形成せらるゝものてある。國民的大活動は實に此の基礎の上に豫期し得られるのてある。而して前に述べた如く我國の地震は、啻に土地を震動するのみてはない、活動の基礎たる此の社會的信用其者を震撼せしめるものてあつて、若し國民にして此の社會的地震を克服し得ず、これは避け難き運命としてあきらめる外なくば、我國民の前途は只衰退敗滅あるのみてある。

四　地震國の最大問題

勿論我等は微少なる人力を以てして大自然の偉力を阻止することの不可能を知

る。然れども人は只自然の奴隷であつて之に打ち勝つ何物をも有しないであらうか。只自然的必然の支配する處のものか。或は又「人の衷には靈あり、全能者の氣息之に聰明を與へ」よく自然的必然以上に立ち得るものであるか、自然主義乃至物質主義者の見解が是か、精神主義乃至信仰者の見解が非か。宇宙は只物質と力とあるのみにしてそこに何等の大なる完成の目的なきものか、或は之は或る大なる目的に向ひ生成發展して居るものか。盲目の運命の占領するところか、はた神の攝理の支配するところか。

此等は只思想家の閑問題ではない。地震に直面せる我國民の大問題である。何となれば、若し地震は盲目無目的であり、地震國に生活することは日本國民の運命であつて、只其の不運と諦らめる外ないとせば、日本國民の前途は暗澹である。然るに天地萬物悉く神の攝理の下に在り、「神を愛する者、すなはち御旨により召された者の爲には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る」（ロマ書八章二十八節）ならば、我らは地震以上の神によつて地震の禍害を克服し得られる。

五　現代人の神の攝理否認

嘗て關東の大震火災の直後、澁澤老子爵は之を以て我國人心の墮落腐敗に對する天譴なりとの說を發表して多數の所謂新思想家の嘲笑を受けた。まことに之は古い思想である。現代人の嘲つて止まない思想である。而して最も多く西洋近代の思想に感染せる我國の新思想家が之を承認する筈がない。

嘗ては宇宙は全知全能にして、全愛なる神によつて創造、維持せられ、一羽の小雀と雖も其の御許しなくば地に墜ちることなしと考へられた。如何なる混亂が世に臨むも、其の內に神の善にして且つ正しき目的が一貫せるものであり、必ず何等かの精神的意義が有るものと考へられた。個人と民族はそれぞれ神より與へられたる天職を有し國の興亡は悉く神の攝理によると信じた。神は前進し給ふ。God is marching on. 假令人類の意思が一時之を妨害するも結局彼の御こころは成就し、「凡

てのこと相働きて益となるを我等は知る」と確信した。

今より百七十年前、卽ち千七百五十六年リスボン市を覆滅せしめ數千人の生命を奪つた地震の際、當時米國に在つて大なる感化力を有したニューヂアーシー大學の學長、サムエル・デービスは、「如何なる自然的災害も皆賢明なる攝理より遣はされたものであつて、邪にして精神的に眠れる此の世をして神の御能力と正義とを覺醒せしむる爲めのものである」と唱へて多大の感銘を與へた。

嘗てマルチン・ルーテルを動かして宗敎改革を遂げしめ、トライチュケをして近世獨乙の興隆は一つに彼の偉業に外ならずと讃嘆せしめ、カルビンの神學となつてネーデルランドに入り、オレンヂ侯ウキリアムの率ゆる和蘭七州をして當時世界最大强國スペインの壓制に抗して獨立し、一時世界の最大の海商國たらしめ、英國にてはクロンウエルの淸敎徒運動となり、後年の大英帝國建設の端緒を作らしめ、メーフラワー號に乘じて大西洋を航し、ニューイングランドに渡りては、遂に北米合衆國今日の發展の基礎をなさしめたのは此の信念であつた。

然るに現代では之は迷信とされて放棄された。そして之に代りてリスボン市の覆滅の時「リスボンは潰れても、巴里は舞踏して居る」 Lisbonne est abimée, et l'on dance à Paris と云つて、地震は神の攝理であると云ふことを嘲けつたボルテヤの思想が漸次勝利を得て、人は皆神の攝理につき懷疑的となつた。一千九百二年、卽ち今より二十五年前マルチニク及セント・ビンセントに於ける火山の爆發に際し、英國のヒッバート誌第一卷「天災と道義」に掲載せられた諸大家の見解は、曩にサムエル・デービスの論じたものと大なる對照を爲すものである。

此等の諸大家の說は悉く天災が人類の道德と關係ありとの觀念は總て迷信なりと云ふに一致して居た。昔は神が天災を下して人類の罪を裁き給ふた。今は人が天災について神を疑ひ、又その處置を裁判しつゝある。裁判せられるものは最早人でなくして神御自身となつて、昔の裁判官は今や被告人となつたのである。

宗教界に於て既にそうてある。まして宗教以外の世界に於てをやてある。疫病は不道德の爲てなく、自然的法則によつて發生する。戰爭も亦民族の生存發展上必然に生ずる衝突てあつて、特に不道德と稱すべきてない。罪とは何ぞや、人類の進化の途上未完成の狀態てはないか。何のそこに絕對的惡が在る。地震とは何ぞや、只地殼の收縮に伴ひ其の力が均衡を失つて、一方に外れた時に生ずるものてあつて、何のそこに人類の精神狀態と關係がある。正しきものも正しからざる者も、皆此の災厄に遭ひてわけへだてはない。何ぞ神の攝理あらんや。

六　不信の結果

此の變遷と共に十八世紀を支配したライプニッツの大樂觀的宇宙觀は近代人の心から消え失せて、十九世紀以後はショペンハウエルのセンチメンタルな人生觀が之を領するに至つた。人は皆世界苦をかこち、理想の到達し得ざるを嘆じ、上を仰がず、己れの臍を見つめるものとなつた。ダーウインの進化論は無神論てはなかつたけれども、生物の發達の原因を生存競爭に在りとして神の手の其の內にあることを否認する傾向を釀成した。スペンサーの哲學は宇宙を物質と力とに分析して、神は在るも人の知り得る處にあらずと云ひ、ハクスレーは現象界を以て唯一の實在とし、人の心は進化の途上偶々顯はれたものてあつて、最初より精神的活動が進化の正路てあることと認めず、之を進化の一副產物たらしめた。

進化發展の終局的目的如何。現代人は之につき何等の確信を有せず、總ては懷疑的にして且つ悲觀的となつた。ラスキンが評した如く、現代人はすべての事を爲すに勇敢なるも只信ずることだけには臆病になつた。然かも彼等は議論に雄なるも胸中に滿されざる空虛を有し、平和なく、希望なく、歡喜なく、讃美は絕えて只鬱勃たる不平あるのみ。僅かの苦痛にも悲鳴をあげ、僅かの不遇にも世をうらむ。彼等は人生を達觀せず、其の眼は眼前數尺の幸福に在るに至つた。常に何ものかを求めつつ、然かも求むる處を知らない。これ現代人の特色てある。

七　スペンサーの告白

スペンサーは其の自叙傳に告白して云つた。「地球上過去長年月の間、大小の劣等の生物が去來し、殺しつ殺されつ漸次進化を遂げたのは何か目的あつてのことか。我等は此の問に對して如何に答ふべきかを知らない。更に之よりも廣大なる問題は、天上の太陽と太陽系――之に比ぶれば我等の住む地球などは數ふるに足りない――此生命なき天の大群をどう解すべきか。若し我等に比較的近接せる此等の天體より進みて遙か彼方なる三千萬の太陽系につき考へんか、其の數、意識ある者の比にあらざる、此の一見無意識なる存在、荒漠たる如き宇宙にそも何の存在の理由がある。此の神祕の奥底に此等總てを包む尙も大なる神祕が存する。永遠の過去より不斷に變化し來り、不斷に永遠の未來に進む此の宇宙はそも何處より來れるか。

此の問題と共に惑心は益々つのる。我等にかく不可解なる總ては、何處にても解すること能はざるものであるかどうか。宜べなり、權威を以て臨む獨斷に人の逃避するのは。かくて宗教的信條は合理的解釋が占めんとして得ず、求むれば求むる程達し得ざる場所を何等かの道を以て占むるに至つた。この宗教的信條から離れることは、その提供する解決を其儘に受け得ないのと、他に何かよき解決の道があるだらうとの願望の結果である事を思ひ、他に合理的解決の道はないことを知る私は彼等と欲求を共通にして、此の宗教的信條を同情を以て見るやうになつた」と。

八　現代の頽癈と二十六個の鉛の兵隊

これ神を見失ひ然かも神を求めて居る現代人の悲痛の告白である。神なくして彼等の生存は意味無きものとなつた。彼等は禁斷の果實を食ひし故に己れの裸體なるを知つた。然かも其を覆はんとして木の葉を綴りて種々の衣裳を作る。人生は只一杯の酒に若かず、生命短かし戀ひせよ乙女と歌ひて、文化生活に耽溺するか、アダムの子カインの裔には只闘爭と支配とあるのみと云ひて超人を謳歌し、遂に世界の大戰を招致するか、或はセンチメンタルなる人道主義よりして社會改造を唱へ、人

の内に潜む偉大なる靈性に安價なる慰安を講ずるより外に道を知らなくなつた。

今や沒落の途上に在る西洋文明の墮落思想は滔々として我國に入り來つた。元來日本人は精神的國民であつて、純信仰を以てその心に訴へて必ず反響のあることを經驗する。之を嘲けるものは殆ど皆西洋から渡來上陸した、新式「二十六個の鉛の兵隊」（洋書のこと）にその心の領土を奪はれたものである。國民をして强健なる精神を有せしめ、欣然として患難に耐え、將來の大計畫を立てしむるものにして古き攝理の信仰の如きはない。神とその導きに對するビジョンのない國民は滅ぶ。人は元來環視的動物でない。彼はギリシャ語アンスロポスの語義、卽ち上を視る、の示す通り仰視的動物である。神を「仰ぎ視よ、さらば救はれん」である。地震は盲目なる運命ではない。國民をして其天職を自覺せしめん爲めの、精練せられたる意味に於ける神の攝理である。（經濟往來二、五）

聖書の生存力

佛蘭西革命の勃發前所謂啓蒙思想が全歐洲に風靡し、ボルテヤは當時思想界の帝王であつた。彼は常に基督敎を嘲つて已まず、豪語して言つた。『基督敎を創始するに十二の使徒が要つたが、今や之を潰すに一人の力で足る』と。又預言して言つた。『今後百年の内に聖書は骨董品として僅に博物館の埃だらけの棚に陳列されるか、さもなくば圖書館の書庫に塵に埋れて何人にも顧られずして所藏せらるであらう』と。

美事に外れたものにして彼の此の預言の如きものはなかつた。彼の死後、聖書は八百三十五語に翻譯せられ、七億四千萬部を印刷し、最近は毎年三千萬部宛刊行せられて居る。

古來聖書程批判の水火を潜り、其の内容を試驗せられたるものはなく、又此の書

程幾度か個人と社會とを根本的に改革したるものはない。一小民族の内に生れた此の書は年と共に其の影響大にして、全世界に感化力を及ぼして居るのである。

「人類の最終局の命運は、其の來るべき時代に於て、それが此の聖書に對する態度によつて定まる」と云ふ人あるも、我等は之を過言としないのである。

然るに今や我國にてはマルクスとレニンとが往年のボルテヤのやうに尊敬せられ、宗教は阿片なりと嘲るマルクスの資本論が聖書に代つて今後人類社會を指導すべしと思ふ者が多數である。然れどもやがて時計の振子は他方に轉じ、時世は一變し、彼等が揚棄したと自負する此の聖書が反つて彼等の資本論を骨董品たらしむる時が來るのはさ程遠き將來ではあるまい。（四・一）

神は愛

神は眞に愛であります。然し乍らその愛は此の世の愛と全然違ひます。彼の愛はキリストの十字架に顯はれた愛であります。私はそれを仰ぎ瞻て、私の罪の赦されたのを信じ、新生涯に入つたものであります。キリストを信じて神の愛の如何ばかり大なるかを知つたのであります。

神はその愛の如何ばかり大であるかを知らしめんため、愛するものを曠野の中、患難の谷に引入れ給ひます。そしてそこで彼に信頼すべきことを敎へられ、彼の愛を知り、新なる希望が我が内に生じ、新たなる生涯がそこから創まるのであります。

斯るがゆゑに我かれを誘ひて、
荒野にみちびきいり、
終にかれの心をなぐさめ、

かしこを出るや直ちに
われかれにこの葡萄園を與へ、
アコル（患難）の谷を
望みの門となしてあたへん（ホセヤ二章）

されば此の世の不幸に遭遇したとき程、神は私を愛し給ふ時はないのであります。己が罪の故になやむとき、此の世の助けの凡てが失はれたとき、我が神、我が神何ぞ我れを捨て給ふやと心に呻くとき、その時程神の無限の愛が私を圍んで居る時はないのであります。仰ぎ見よ、主イエス・キリストの十字架を、彼より流れ出づる愛の泉、これが我が生命であります。

斷崖絶壁の上を歩む時、下を見たならば足が縮んで一歩も出ません。只上を見てキリストに信頼して進めばよいのです。力はそこから來ます（四・八）

惡の存在

今の世に多くの罪惡がある。又害惡がある。我らの住む此の天地は決して完全ではない。大地震があり、大暴風あり、昔は大饑饉があつた、今後も亦あるかも知れない。大疫病も起るかも知れない。大戰爭の噂は、度々軍備縮小會議が開かれるに係はらず常に絶えない。社會には貧富の懸隔があり、富者は奢り、貧者は窮す。病に呻吟する者、人の無情に泣く者、世の暗きに悲しむ者が多い。正義の士は不遇にして惡人時を得る。これ何故か。神はありや、神在し給ふならば何故かゝる惡を此の儘に放置し給ふのであるか。

ある人ルーテルに神樣はなぜ地獄を御つくりになつたかと尋ねた。ルーテルは之れに答へて云つた。『多分君のやうな閑人を投げ込むためであらう』と。何故人は罪を犯すか、ルーテルにはそれは閑人の閑談であつた。彼にとつてはそんなことはど

うてもよい。只現在罪人である我らがどうしたならばこの罪から脱して聖い者となり得られるか、これが彼には必死の問題であつた。そしてイエス・キリストを信じて神から此の罪を赦されて平安を得、患難にも神の榮光を望みて喜ぶやうになつたのであつた。此の經驗を得た者にして始めて、何故神は世に罪を許容し、今尙放置して居給うかが薄ぼんやりとわかつて來るのである。然し乍らそれは他人に説明してもその人がそれて納得するかどうかはわからない。

何故神は此の世に天災と人の罪とを其の儘に放任し、今直ぐに之れを除いて完全な世にし給はないのであるか。そんな問題はカーライルが云つたやうに、『最後の審判がすんだ日の午後の茶話』にするまで仕舞つておき給へ。それよりも先に先づ解決しなければならないことがある。それは君が神に背いた罪の仕末である。（五・七）

文明の進歩と自然の復讐

圖らずも東京の場末に住むものとなつた。大都市は門前まで來て居る。然かも家を出づること數町にして、こゝは未だ昔乍らの武藏野の原である。雜木林に圍まれた農家が各所に點在し、大根畑は秋日に照され青空を地に反映して居る。自然の領域である。されど日夜間斷なく膨脹する都市は此の自然の領域を日毎に蠶食しつゝある。郊外電車は無遠慮に自然の神秘と平和とを破つて侵入し來り、其の附近の畑中には隨處に文化住宅が建てられて居る。自動車は時々奇叫を發しつゝ、濛々たる砂塵をあげて、宛ら惡鬼の如く走りつゝある。これが文明の進歩であるとのことである。人類が其の發明した機械の力によつて此の地球を占領して、これを我物顔にしつゝある姿である。

私はこゝに來て、まざ〳〵と文化が自然を克服する有樣を觀た。それと共に私の

心に大なる疑問が生じた。此の無言にして柔順の如く見ゆる自然は果して文化の爲めに征服され終るものであらうか。又かくされたる時、人類に黄金時代が出現するのであらうか。或は又此の自然は文化に對して怖るべき復讐を企てつゝあるのではあるまいか。若し然りとせば其の鬪爭の結果如何。

私は我國現代の識者の多くが殆ど無條件に人類進歩論者であることを觀る。彼等は人類社會は此の儘にて、日に日に進歩發達し、遂に理想境に到達するものの如く信じて居る。近代人は信ずること以外何でもする勇氣があるとラスキンは言ふが、近代人にも一つの信念がある。それは人類社會の進歩と云ふことである。彼等は此の信念の基礎を或はヘーゲルに、或はコントに、或はダーウキンに置いて居るらしい。されど此等の哲學者と科學者とは果して彼等の信念の善き支持者であるであらうか。私は今此の事を論ぜんとするものではない。現代の西洋文明が果して人類社會を「進歩」せしめつゝあるかどうかを考へて見度いのである。

一體進歩とは何を云ふのであらうか。ヘーゲルはそれは精神的自由の發達であると考へた。それならば現代にどれだけ精神的自由が發達したか。なる程、現代は未曾有の物質的繁榮の時代であり、知識の集積せる時代であり、文物制度の備はつた時代である。そして社會組織は益々複雜となりつゝある。若し此の社會生活の複雜化が進歩であるならば現代は明に進歩せる時代である。されどそれは決して精神的自由の發達と同一ではない。外なるものが如何に整つても、内なる各人の性格が向上しなければ精神的自由とは云ひ得ない。現代に此の自由があるであらうか。

現代文明とは西洋文明のことである。そしてそれは機械文明のことである。かの産業革命以來商工業が異常に發達し、都市の大膨脹となつて顯はれた文明である。世界の西洋化であり、田舍の都會化である。されどこれは決して自由の發達と同一ではない。

嘗てアリストテレスは、をさが若し自ら動き、又琴が若し自ら奏づるに至らば奴

隷はなくなるであらうと豫言したが、現代には種々發達した自働機械が發明されたが、之は決して奴隷をなくしはしない。却て多數の者をして此の機械の奴隷たらしめ、之に使用せられずば日々の生活を營み得ないものにしてしまつた。彼等は終日、單一にして無味なる動作を繰り返すのみであつて、彼等の内に潜む其の他の能力は之を使用する機會なく、從つて漸次退化しつゝある。彼等は最早自ら家を建てることを得ず、衣を織ることを得ず、田を耕すことの道を知らない。まして、天を仰いて星と語る心情を有しない。

機械の發達は自然の征服である。此の結果自然は荒され、軍艦其他有用又は無用のものを造る爲め石炭と鐵とは掘り盡され、森林は新聞雜誌を作る爲めに悉く伐採せられやうとして居る。昔の詩人は「彌生の森の一感激は人につき、善惡につき、總ての賢者の敎に勝る」と歌つたが、今や此の綠林は人につき、良心につき何ものをも敎へない現代社會の木鐸、ヂヤーナリズムの爲めに切り倒され、其の跡には煤煙濛々として天を覆ふ煙突の森林が生じ、都市生活者の肺を黑色に染めつゝある。

此の文明の進む處、貧富の懸隔は益々甚しからんとして居る。貧者は貧乏の故にいつまでも貧乏から脫することを得ず、富者は富貴の故に己を害し、其の子孫を薄志弱行の徒となさしめて居る。彼等は宛もラボックの書いた奴隷を有する蟻の如く、己れ自らは食物を口に入れることすら出來なくなりつゝある。

此の故に何事にも「救濟」が叫ばれ、現代國家は一大養老院と化し、此等自立し得ざる者の救護に日も足りない。人口增加の壓力を緩減せんとして試みられる產兒制限は此等の不勞者の產出を防止し得ずして、反て社會の中堅たるべき者の子孫の產出を防止する結果を來さんとする。これが現代文明であり、都市文明である。此の文明が自然を征服しつゝある間に、自然は默々としてその爲すが儘に任せつゝ、大なる復讐を企てて居るのである。

日本も亦、西洋諸國に後れざらんとして鋭意彼の文明を採用し、產業立國は畫策

せられて、産業戰に敗者たらざらんとして居る。そして都市の膨脹と農村の疲弊とありて、此の自然の復讐を體驗しつゝある。世界の産業戰に勝つも倒れ、敗るも倒れる。文明の「進歩」の結果は勝者も敗者も共倒れてある。然らば人類の將來は只滅亡と暗黑とあるのみてあらうか。

然り、若し「萬軍のエホバ、われらに少しの遺(Remnants)をとゞめ給ふことなくば、我らはソドムの如く又ゴモラに同じかりしならん」(イザヤ書一章)である。されば我等は憂ふるを要しない。此の世の論者をして社會改造を論ぜしめるがよい。我等は之と關はる必要がない。新社會の萌芽は眼未だ見ざる處に確に存在して居ることを知る。(經濟往來二・一一)

ガリラヤの春

一　ガリラヤ湖畔

イエスが始めて公然、神の國の福音を說き給ふたのは其の首都エルサレムてなくして、北方の邊陬ガリラヤ湖畔、漁夫たちの群にてあつた。時は多分紀元三十四年の春てあつたと思はれる。

視よ、冬すてに過ぎ、雨もやみてはやさりぬ。
もろ〳〵の花は地にあらはれ、
鳥のさへずる時すてに至り、
斑鳩(やまばと)の聲われらの地にきこゆ。
無花果(いちぢく)の樹はその青き果を赤らめ、
葡萄の樹は花さきてその馨(かをり)しき香氣をはなつ。

わが佳耦よ、わが美しき者よ、起ちて出てきたれ。
磐間にをり斷崖の匿處にをるわが鴿よ、
われになんぢの面を見させよ、なんぢの聲をきかしめよ、
なんぢの聲は愛らしく、なんぢの面はうるはし。（雅歌第二章）

洵に神の國を說くにふさはしき頃であつた。彼の宣傳へ給ふた福音を福音書は要約して、「時は滿てり、神の國は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」（マルコ傳一章）と錄した。時は滿ちた。彼の來り給ふたのは宇宙の進化と人類歷史の發展途上必要の時期であつて、且つ神に於て永き準備の後であつたのである。

ガリラヤの湖はヘルモン山麓より湧き出でて、南方ヨルダンの溪谷を經て死海に注ぎ入る水の一時其の流れを留めて湖となつたものである。海面以下六百五十尺、長さ十五六哩、幅九哩餘、碧水たゝえ、風吹かばさゞなみ岸に寄せ來り、岸は白砂と礫にて覆はれて居る。かなたの水平線に日光輝き、水は紺碧の藍の如く、周圍は火山岩に圍まれて居る。ヘルモン山は雪を頂いて北方に聳え、東南の方ペレアの高原は湖畔の平野を限つて彼方に見える。

此の湖畔にチベリアスの町あり、又マグダラ、カペナウン、ベテサイダ等の村落が散在して居た。チベリアスの町にはイエスは一度も足をふみ入れ給ふた記錄がない。彼の傳道の中心はカペナウンの漁村であつた。こゝが基督敎の發祥地とも云ふべき地である。爾來世界の歷史を動かした基督敎にして若し其の發祥地を記念すべくば此の地を記念すべきである。然るに此の村は既に滅び、近年の發掘により僅に其の所在を知り得るのみとなつて仕舞つた。

我等は何故永い間此の村が跡方なくなつて居たかその理由を知らない。多分これには何か深き意義があると思ふのである。此の民族の產出した最大偉人の一人であるモーセの墓も其の始めから神はこれを秘し給ふた。多分これは我等が常に地上のことに心執はれ、眼に見ゆるものゝみを眞とし、見えざる靈の世界の存在を忘れ易

いのを戒しめ給ふ神の深き御心によるのではあるまいか。我等の住むべき眞の世界は眼に見ゆる此の世界ではない。信仰に由つて認め得る永遠の世界である。神は我等に此の事を敎へ給ふために、時としては我等が此の地上で最も愛し最も貴重とするものをも何の惜しげもなく奪ひ去り給ふのを見る。かくして我等は幾度か我等の畏敬する人々の愛する者が死んで彼等からもぎ取られるのを見た。然かも此の事ありて以來此の地に殘されたものは一入に神を慕ふのを見た。

然り、我等も亦餘りに史的イエスの詮索に心を勞し、今復活して天に在す、生けるキリストを仰ぐことを忘れてはならない。彼は一度此の地上に生き、又死し給ふたが、死して甦り、今は聖靈を以て我等の靈に臨み給ひつゝある。彼と彼を信ずる我等との關係の親しさは、我等各自の關係が如何に親しくとも之に比ぶべくもない。親子の情、夫婦の愛、君臣の義、これらは皆限りある者と限りある者との關係である。されど我等の彼に於ける關係は氣息(いき)よりも尙密接に、手足よりも尙近いのである。

されば基督敎の眞理なることの確證はこれを單に史的イエスに求むべきではない。況んやこれを比較宗敎に求むべきではない。聖書に應じて我らの罪のために死し、また葬られ三日めに甦り、ケバに現はれ、後十二の弟子に現はれ、次に五百人以上の兄弟に同時にあらはれ、次にヤコブに現はれ、次にすべての使徒に現はれ、パウロに現はれ給へる生けるキリストこそ其の權威である。

此のキリストが聖靈を以て我等の心に臨み給ふ時、我等の生涯がこゝに一轉機を劃するのである。こゝに動かすべからざる眞理に對する確信が生ずる。それはイエスと其の敎が我等の思想の一部分となるのではない。生けるキリストが我が思想と生活の中心となり給ひ、此の中心を繞つて新なる思想系統が生じ、生活の目的が確定し、新生涯が始まるのである。彼に接して始めてイエスの語り給ふた悔改め（メタノイヤ）が生ずる。卽ち爾後の人生觀が一變し、道德的に、はた理智的に心意に

一變轉が生ずるのである。彼が我が中心となり給うて、始めて我等は見ゆる世界の奥底に在つて永遠に保つところの見えざる世界の上に立脚し得るのである。

我らの見る世界の内なる眞の世界、

我らの世界は唯之を圍む岸邊のみ。

こゝが我等の國となるのである。

然かも此の「經驗的キリスト」は決して「史的イエス」を離れて別に存在し給ふのではない。我等は聖書にイエスの言行を讀んで、我等の内に在つて聖靈によつて我等と語り給ふキリストを經驗し、その實在を確め得るのである。かの風光明媚なるガリラヤの湖畔にて、春風駘蕩として人々天地の惠みに感謝する時、こゝに始めて神の國の福音を說き給ふたイエスこそは我等の生けるキリストである。

二　自然と人

ガリラヤ湖はルナンによれば魚類の多きこと世界稀に見る湖水であつた。其の湖畔はイエスのこゝに現はれ給ふた當時は氣候溫和にして、土地肥え、樹木よく繁茂し、殊に珍しきは此の地には熱帶の植物が溫帶及び寒帶の植物と並び生長し、一度春來るや種々の花一時に咲くの奇觀を呈し、其の當時の史家ヨセーフスは之を以て自然界の奇蹟とした。若し人類が自然を左右する好適例を求めんと欲するならば、之を現在の此の地方に求むべきである。ユダヤ國亡び、ユダヤ人其の國を追はれ、其の後土耳古人の有となり、殊に十字軍の反動として土耳古人が此の地を荒して以來、ヨセーフスが奇蹟として驚嘆した此等の樹木は悉く其の跡を絕つに至つた。氣候も亦激烈となり、旅人は此の地を旅するとき豫め其の次に憩ふべき樹蔭の所在を確めて後出發することを要するやうになつたのである。

今や世界何處に於ても最大の問題は近來激增せる人口をどうして養ふかと云ふことであり。各國皆天然の資源の缺乏を憂ひつゝある。世界最大の資源を有する北米合衆國に於てすら資源保存が問題となつて居るのである。これは何故であらう

か。天然は人類を養ふ資源を供すること甚だ吝嗇の爲めか。否、決してさうでない。此の地球にはまだ〳〵夥多しき富が藏せられ、人の來つて之を利用することを待つて居るものである。

然らば何故に人は其の資源の缺乏を憂ひつゝあるか。これは人々が信仰を喪失した爲めであると私は思ふ。彼等は知識の果實を食ひし故に見えざる眞の世界から追はれて、唯見ゆる影の世界に住むに至つたのである。この結果人は精神的發達に心をとめず、物質的慾望の追求が唯一の目的となつた。昔は何處の森にも鎭守の神が居し、こゝは神聖なる場所として尊敬せられたが、今や總てを物質と力とに分析して事物の一方面のみを抽象する科學の發達は自然の神秘を無視し、人をして唯此の物質と力とを利用してその物質的慾望の滿足のみを思はすに至つた。これが爲凡ての森は切倒されて有害無益なる新聞雜誌の原料とせられ、石炭と鐵とは掘り盡されて軍艦と大砲の製作に用ひられつゝある。

各人の物慾滿足がその唯一の目的となつて、人も亦人たるの尊嚴を失ひ、唯機械の一種としてのみ認められ、之が運轉維持に必要なる賃銀を拂ひ又之を受取れば、それで人と人との關係は盡きるものとなつたのである。近代に奴隷なしと云ふが、然し昔の奴隷は少なくとも其の主人から一生の生活の保障を得た、然るに現代の自由勞働者には之がないとカーライルは其の著「過去及び現在」で言ふ。昔は人と人との關係は唯金錢支拂關係ではなかつた。そこに人情があつた。然るに今は「一日の勞働に對する一日の公正なる賃銀」が要求せらるゝことの外に何ものもない。然かもその公正なる賃銀すら與へられない。

人々は云ふ、全人類は一家族であると。果してさうであらうか。どんな家庭でも夫は其の一家を養ふ爲めに、妻は夫に仕へ子を育てる爲めにその賃銀を請求するものはない。その代り一家の一人病めば全家之が爲めに憂ふのである。家人皆他の人の爲めに存在し、他の人の爲めに働きつゝある。然るに全人類社會は決してかゝる

ものてはない。人は唯自己と自己の家族のことのみを思ひ、その獲得した富を以て隣人の急を救ひ、社會を益せんとはせず、唯自己の現在の快樂を追求めて居るのてある。

現代の發達せる知識、精巧の機械、宏大なる各種の組織、これらは人の精神的發達の爲めにあるのてなく、自然と人との搾取に使用せられて居るのてある。そして物質的慾望追求の爲め、各人間に美望と鬪爭とを激發せしめつゝある。階級と階級、國と國とは之が爲め相爭ひつゝある。幾度か軍備縮小の會議は開かれても、少しも軍備縮小の實は上らず、今ては反つて大戰前よりも軍備は著しく擴張されて居るのてある。これは各國の眞意が平和を欲せず、機あらば他を凌がうとする心があるからてある。若し今にして改むる所なくば世界第二の大戰爭は避け難く、自然は荒廢し、地球は修羅場と化する惧がある。「土は汝の爲めに詛はる。汝は一生のあひだ勞苦(くるしみ)て其より食を得ん。土はいばらと薊とを汝のために生ずべし。」(創世記三章)てある。

此の文明の進む處地球は砂漠とならざるを得ない。

此の混亂は人が精神世界の確實なる實在を影と見、物質世界を眞とするに至つて生じたのてある。此の惡魔の文明は既に西洋諸國を支配し、此の度の大戰により之を荒し、今や次第に東洋を蠶食せんとしつゝある。そして我國の如きは既に殆ど之に征服せられたのてある。人は此の文明を稱して基督敎文明と云ふが。正に其の反對が眞てある。基督敎文明とはかゝる物質的肉的文明てはない。精神的道德的文明てある。愛、喜悅、平和、寬容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制の行はるゝ處てあり、之が手段にあらず目的たる世界てある(ガラテヤ書第五章)。

私は科學は自然の神秘を無視するものてあると述べた。然し科學者は悉く唯物論者てはない。現代英國の生物學の泰斗オックスフォード大學のJ・S・ハンデーン博士の如きは明言して居る。「物質世界は今迄盲目なる機械の如き世界として見られて來たが、それは精神世界の極く一部分を見たるものに過ぎない。唯一の實在の世界

は精神世界である」と。世界は今や其の眼をこの唯一實在の精神世界に轉ずべく餘儀なくされつゝあるのである。彼らは再び歸へり來つてガリラヤ湖畔に敎へ給ふたイエスに聽かねばならなくされて居るのである。

三　會　堂

イエスは安息日毎にガリラヤ湖畔の會堂で敎へ給うた。ガリラヤの漁夫農夫たちの集まる場所はこの會堂であり、集まる日は安息日であつた。會堂は各町、各村に必ずあつて、こゝに彼等は安息日毎に集まつて彼等の經典を讀み、之について考へるのが彼等の習慣であつた。會堂は正方形の建物であつて之に玄關が附屬し、內部には腰掛あり、又經典を讀む講壇あり、此の經典を收める押入があるだけである。此の簡素極まる建物こそはユダヤ人の精神的、社會的、國民的全生活の中心であつた。否今尙彼等の中心である。ここて彼等は己が民族が神から特に選ばれた民であり、特別の使命を有するものであるとの確信を養ひ、彼等の中に顯はるべき救世主とその建設する神の國につき希望を語り合つたのである。

ユダヤ敎には首都エルサレムを除く外、特に祭司又は牧師と稱すべきものは居ない。何人でも講壇に上り經典を開いて之を讀み、之に關する自己の見解を述べることを得た。そしてその者の述べた意見に對しては聽者は立つて質問を發することを得た。それがため會堂は屢々討論會場に化することがあつた。此の會堂には會堂長あり、長老あり、又執事あり、一個の自治體を爲し、その決議はユダヤ人の社會的生活を規律し、時には違犯者に體刑を課すこともあり、ロマの官憲も此の自治を認めて來たのである。此の會堂と此の制度とありし故にユダヤ敎はユダヤ國亡び、ユダヤ人は世界の諸國に流浪し、千數百年の迫害の內に在りても尙よくその民族の純正を保持し、今日に至るも尙潑溂たる生氣を有するのである。此の會堂に於て彼等の熱情はそゝがれ、彼等の意見は闘はされ、祖先の傳統を維持すると共に新らしき時代の新らしき衣は提供され、新生命は注入されたのである。

かくの如く何人と雖も此の會堂に立ち、又街頭に家庭に民衆の敎師として自己の確信を述べ得ることはユダヤ人の奪ふべからざる傳來の自由であつた。之をなすには何の資格を要しない。學校を卒業すると否と、試驗に合格せると否とを問はない。エルサレムの學府、當時の碩學ヒルレル、ガマリエルの門下の秀才と雖も、その民衆に受入れられるのは、その學歷あるためにあらず、其の言が民衆の肺腑をつくか否かによるのである。民衆は彼等の經典たる舊約聖書により神はよく預言者を牧羊者農夫の群より起し給ふことを知つて居た。されば學者敎師たちよりも聽者を感動せしめ得る力を有する者は此等より優りて大なるものと認められ、野に叫ぶバプテズマのヨハネ、大工の子イエス、漁夫の子のペテロやヨハネの如き皆民衆は之を預言者と呼んだのである。イエスは實に彼等の預言者であつた。

四　神の國

イエスは安息日毎に此の會堂に立ち、又屢々會堂外或は湖畔の漁舟より、或は附近の山上に於て民衆に新らしき敎を說き給うた。聽く者は平和單純にして、勞働によつて生活せる者であつた。イエスの敎は實はかゝる者に最もよく理解せられ實行せらるゝものである。時は春、空は長閑に野は綠であつた。彼等の內に未だ學者又はパリサイ人は居なかつた。イエスは此等の傳來的又學問的偏見に捕はれたものに煩はされ給はなかつたのである。

彼は人は此の地上に生れて求むべき最大のものは何であるかを說き給うた。人の先づ求むべきものは何を食ひ、何を著ることであるか。財寶を山と積み安樂に一生を暮すことか。或は又人は假令饑え渴き裸にせられても、尙他に求むべきものがあるか。胃袋か靈魂か。物質的充滿か精神的完成か。快樂か義か。富か神か。これ人の解決すべき根本問題であり、やがて出現すべき神の國を示す新宗敎の出發點である。

「なんぢら己がために財寶を地に積むな。こゝは蟲と銹とが損ひ、盜人うがちて

盗むなり。なんぢら己がために財寶を天に積め、かしこは蟲と錆とが損はず、盗人うがちて盗まぬなり。……人は二人の主に兼ね事ふること能はず、或はこれを憎み、かれを愛し、或はこれに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事ふること能はず。（マタイ傳六章）

人は單純にして一本調子なるを要する。かくて彼は空の鳥、野の百合（アネモネ）を指して敎へ給ふた。

「この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父はこれを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優るゝ者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや。又なに故衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我汝らに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして汝らをや。あゝ信仰うすき者よ、さらば何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふな。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と神の義とを求めよ。然らばこれらの物は汝らに加へらるべし。」

「まづ神の國と神の義とを求めよ」である。「神の國」とは何を言ふか。それは天地萬物を己に服し得る絶大の能力を以て實現せらるゝキリストの國である。これは人間の努力、社會制度の改革によつて出現するのでなく、キリスト先づ各人の心に臨み給ひ、これを其の心底から一變し、それと同時に萬物を復興し給ふことによつて生ずる聖國である。

さらば「神の義」とは何か。それは人の義と異なる。神の人に賜ふ義である。人間本來の善性を言ふのではない。其の道德的精進品性の修養人類愛の發揮でもない。

誠實純眞でもない。人が己の心の醜惡から脫せんとして脫すること能はず、神の前に明に見ゆる自己の罪の責任感にもだゆる者が、神の我等に賜うた深遠なる恩惠、卽ちキリストにより其の罪を赦され、新に神の子とせらるゝことである。此の義を纏ふてこゝに始めて平安生じ、歡喜心に湧き出て、神をアバ父よと呼び得るのである。これ人の先づ求むべき神の國と神の義である。而して此の國と此の義とは畢竟キリストを信受すること以外にない。されば先づ悔改めて卽ち心意一轉して彼自身を信受せよ、然る時は人間生活に必要なる物質はこれにつけ加へらるべし、これ彼の敎であつた。明に產業立國の正反對である。

實にそのすくひは神をおそるゝ者に近し
かくて榮光われらの國にとゞまらん。
憐憫は眞實と共にあひ、義と平和と互に接吻せり。
眞實は地よりはえ、義は天より見おろせり。

エホバ美物を與へ給へばわれらの國は物產を出さん
義はエホバの前にゆき、エホバの步み給ふ跡をわれに踏ましめん。(詩篇八十五)

これ神の國と神の義である。そしてその出現によりいばらと蒺の生ずる呪はれた る地は聖められて、之より物產をいだし、之等は皆御添えとしてつけ加へらるのである。人類の救濟の完成、其の榮化に伴ふての萬物の復興である。それは靈的にして且つ物的である。靈なるは本質であつて物なるは外衣である。靈的一新による地的聖化である。これが神に救はれたる者の將來住み得る新天新地である。イエスの說き、彼によりて完成せらるゝ神の國はこれであつた。

深く我等の棲む此の地球を究めたるものはその內に莫大な富が存在し、今まで人の利用したものは只その僅少なる一部分に過ぎず、此等地上又は地中に深く藏せられた富は人の來つて之を利用するを待つて居ることを確信して居る。然れども此の地球上の富よりも更らに莫大なる精神的富源が人の內に存し、天然も人も聞えざる

呻めき聲を以て之が發揮を仰望して居るのである。然かも人は自ら之を發揮せしめ得ないのである。これ人の裏に在る罪、卽ち生命の本源なる神よりの分離の爲めであつて、其の復歸をばパウロの言ふ如く、肢體のうちに他の法があつて之を妨げるのである。此の罪からの解放、神への歸還は只神のみ之を爲し得給ふ。そして神はこれをキリストによつて爲し給ふたのである。人キリストの內に生き、キリストの如何なる方であるかを知り、又同時に己の如何なる我等の內に生き給ふて始めて神の如何なる方であるかを知り、彼に在りて神は我等の父にして、人は皆兄弟、萬物るものなるかを知るのである。彼今己を信ずる者の心に宿り給ふ。やがては我等の物であることを知るのである。此の天地を一新し給ふ時が來るであらう。（ピリピ書第三章）。我等の希望は實にこゝに在る。（三・四）

唯一の眞なるもの

眞に確實なるものは我らが現に見る此の世界と此の人生ではない。此等は來らんとする善きものの影である。萬象悉く變化し、推移する。何一つとして確實恒久なものはないのである。我身然り、他人も亦然り、時めく富者も今日は裏店に住み、昨日の親友も今は仇敵となる。諸行無常であり。生者必滅。會者定離である。まことに『人はみな草なり、その榮華はみな野の花の如し、草は枯れ、花はしぼむ』（イザヤ書四〇・六）である。此の世に於て榮ゆること、時めくこと、これらは槿花一朝の夢に過ぎない。コヘーレスは嘆じて言つた『空の空、空の空なる哉、凡て皆空なり』と（傳道之書一・二）。

然るに此の空なる世の中に在りて唯一つ空ならざるものがある。『されど主の御言は永遠に保つなり』（ペテロ前一・二五）である。萬物は凡て空しく、萬人は悉く僞るも

のてあつても、之だけは永遠性を帶ぶ。人は此の御言を信じて始めて確實なる地盤に立ち得るのてある。人の智慧が悉く空に歸する時、神の御言のみは完全に成るのてある。

御言は云ふ、神はキリストにより我らの罪を赦し、我らを義とし給ふた。彼を信ずる我らは最早その罪は除かれ、既に神の前に聖なるものとせられたと、これ永遠に保つ神の言てある。

されば人々よ、互に人々の現在の缺點、その罪について非難し合ふことをやめよ。又自ら己れの内を見て嘆ずることをやめよ。やがて時來つて、神の御言は我等の眼前に其の眞なることを明かにするてあらう。我らは正眞の聖者となり、天地は榮光に包まれるてあらう。神の御言のみ眞てある。現實の世界と我等とはやがて來らんとする者を迎へ容れ奉るべきその額緣に過ぎない。（五・二）

胃の腑哲學

一　食　傷

フキンランド人は人の靈魂を以て胃袋の一種と思つた。我等は敢て之を怪しまない。なぜなれば現代人の靈魂は胃袋以外にないからてある。彼等は眞の靈魂を失つて、その代りに科學と此の胃袋とを得たのてある。現代に於ては神とか來世とか云ふことはどうてもよい問題てあり、聞くだに抹香臭い不愉快な事柄てあり、社會の進運を阻害すること阿片と異ならざるものとなつた。

彼等に若し神ありとせばそれは科學てある。人は科學の祭壇に跪き其の審判に服從する。科學の名に於て宣告せられたることに對しては最早何處にも上訴する場所がない。科學が判決する迷信の一語程怖ろしいものはない。かくして迷信を怖れつつ科學を迷信する現代人の最大の價値は現世界以外には存在しなくなつた。彼等の

最大の關心事は如何にして此の世を改良するか、現在の社會制度を最も合理的なるものになし大衆を安樂に生活せしめ得るかに在る。無產階級の解放と社會の改造と云ふ語程現代の青年の血を躍らす聖語はない。一度、現社會制度の不合理と其の改革叫べば、忽にして青年渴仰の的となり、其の著書は洛陽の紙價を高める。

人は皆自由を要求する。然れども其の自由なるものは決して、己にせられんと欲することを人にするの自由ではない。勞働せず又は少しく勞働して、人並又は人並以上の分配に與らうとする自由である。勞苦はなるべく之を避け、美味はなるべく多く之を食ひ得るのが彼等の理想の社會である。

彼等の哲學は云ふ、社會の基礎は經濟に在り。其の上に政治があり、科學があり、藝術があり、宗敎があると、古人も衣食足つて禮節を知ると云つた。バンフキールドの經濟學は、人は低き欲望の滿さるゝに應じて高き欲望が生ずると云ふのである。されば一度此の經濟的基礎に變動が生ぜば、其の上の建築は悉く革命を受ける。善き社會は善き經濟の上に立つのであると、かくして產業立國は大政黨の最大政綱となり、政治の要諦は大義名分にあらずして、生活の安定に在るに至つた。如何にして國民の胃袋を滿さしめんか之である。洵に胃袋なる哉である。

嘗て十七世紀の英國に淸敎徒なるものが出て身命を賭して戰つた自由と近代の自由とは全く別物である。クロンウエル、ハムデン、ピム、ベーン等が奮然立つて民衆を指導し、社會を其の根底から改革し以て今日の大英帝國の基礎を造つた彼等の目的も亦、何を食ひ何を著んと思ひ煩はない社會を造るのに在つたが、彼等はその社會の實現は社會制度の變革によると思はなかつた。先づ神の國と神の義とを求めよ、さらば此等のものはつけ加へらるべしと信じたのである。

さらば彼等の主眼は議會を毎年開くか三年目に開くか、租稅は悉く議會の協贊を要するか否かの問題ではなかつた。聖書に在る「御心の天に成るごとく地にも行はれん事を」、（マタイ傳第六章）これであつた、其の當時最も常識的なものにして彼等の如

きはなかつた。然かも此の健全なる常識の所有者は現代人と其の科學とが目して迷信とする聖書の眞理、それに基く此の大目的の爲めに生き又之と共に死するに價すると思つたのである。近代の胃袋の自由とは似ても似つかぬものであつた。

今やこれ等のことは過去の夢となり去つて、世界何處に於ても最大の問題は經濟問題である。殊に人口問題である。我國に於ても蕞爾たる列島に棲息する六千萬の「羽のない二足動物」を如何にして食はしめんか。現代人の靈魂なる胃袋は其の神なる社會科學に「我等は生くる爲めになにをなすべきか」を祈り求めて已まない。

然るに奇體なことには我國の現在程食傷患者の多い時代は前代未聞である。國民の殆ど全部が食傷に苦しんで居る。我等は食へなくて餓死した者を殆ど聞かないが、年々歳々胃腸病の爲め死亡する者の甚多きを知つて居る。

否、啻にそれ計りでない。世間に於ては無學の禍を說くも、實際の禍は學問の中毒に在る。小學校に入るより早く不消化の知識を無理やりにつめ込まれた學生、彼等が社會に出てた時には頭ばかりが大きくなり。足は益々細りて堂々と大地を濶步する氣力を失ひ、何ものにか依賴せざれば生きることが出來なくなつて居る。マルチン・ルーテルは單身ウォルムズの會議に出席し、當時の世界の最大權力に向つて、「我茲に立てり」Hier stehe ich ! と云つた其んな足は最早現代にはない。只頭ばかりがある。大實業家は己の責任を明にせんとせず、一度非境に陷れば直に政府の保護を懇請し、國民は其の職業と銀行預金とを失ふことが何よりの恐怖となつた。

一言にして云へば現代は悉く神經衰弱症である。胃の食傷は脊髓神經を衰弱せしめて骨なしとならしめ、知識の食傷は腦神經を衰弱せしめて確乎たる信念を失はしめた。過食によるプトマインの發生中毒のため、身心は疲勞の極に至つた。產業立國は遂に神經衰弱國を作りつつある。文化生活と文化科學、あらゆる文化の行先も亦こゝにあるらしい。

我國の醫學の進步は世界に對して誇り得るものであると云ふ。然るに今や古い漢

法藥が擡頭して來、賣藥廣告は新聞の全紙をうづめ、社會は藥品の洪水を受けつゝあるは何の故か。これ藥の無效を語るものではないか。疲勞せる肉體の內に如何に多くの藥品を詰め込みたりとてそれて生活機能の活動を復活せしめるものでない。只一時の刺戟を與へやがて更に之を衰弱せしむるまでである。自然に還れとは佛蘭西革命當時叫ばれた野の聲であつたが、今も不信仰なる世界の文化病を癒すには自然療法がよい。

二　自然療法

こゝに自然療法と云ふのは其の昔說かれた自由放任を云ふものではない。只自儘に放任して置けば自然によくなると云ふのではない。自然の力を受け容れるのに最も適當の狀態に身心を置くことを云ふのである。清淨なる空氣、耀々たる日光、生々たる天地自然の活力を充分に攝取することである。

身體の虛弱は榮養の不良に在ると云ふ。洵に其の通りである。だがそれからして、だから美味を澤山食べなければならないとの結論は出て來ない。消化能力を失つた者には如何なる榮養物も榮養にならない。却て胃袋內に瓦斯を醱酵せしめて、自家中毒を起すものである。醫藥も亦然りである。人間の健全なる食物はなるべく料理しない、原始的の且つ植物性の食物である。然かも之を多く攝取することでなくして善くかんで少しく攝取することである。白米とは何であるか。これ米の內最も身體の健康を增進せしめる糠(米の康)を去つた粕(米白)ではないか。文化はこの一事を以てするも正道を外れたことを思はしめる。

之と同樣に現代病なる腦の神經衰弱も亦餘りに多くの知識の詰め込を止め、學生をして試驗地獄から解放することが必要である。由來知識尊重は活動尊重から來る。活動尊重は成功者崇拜である。人間の偉大さを自動車一日の運轉哩數で計量せられる間は神經衰弱はなほらない。さればアメリカニズムを捨つべしである、必要なるものは活動ではない、充分なる睡眠と少量の食物と清新なる空氣と充分なる日

光とあつて腐敗は之を防ぎ得る。諺に曰く「日光の來ない處に醫師が來る」と。

然り、日光の來らざる處には百鬼が夜行する。先頃勃發したる恐慌の原因は何であつたか。反對黨は之を以て前藏相の失言なりと云ひ、政府黨は之を以て反對黨の惡宣傳であると云つた。然れども火のない處に煙は立たない。正邪時に其の判定に迷ふことあるも虚僞はいつまでも隱れては居ない。禍亂の生ずるには必ずそれに相當する原因がある。此の禍根を永く內に祕すれば祕するだけ內攻し、化膿し遂に病は膏肓に及び、總ての組織を腐朽せずにはおかない。

樵夫山に入り斧を振ふこと數回、地を震動せしめて大樹は倒れた。之を倒したものは斧だと人は云ふ。然れども見よ、此の大樹の內部は既に腐朽して空洞となれるを、「近代の預言者」と云はれたカーライルは佛蘭西革命について言つた。國家の內部の腐敗、經濟社會の病患、之等は日光の來らざることより發生し、永く之を隱蔽すればする程腐敗は甚しく、遂に大事變となるてある。

さばゑなす、もろ〳〵のわざはひは天の岩戸に日光の隱れた時に發生した。社會の病患に對する自然療法とは先づ日光をして社會の隅々までも照さしめることてある。總てを國民の前に公開して、日光消毒を行ふことてある。私は先頃の恐慌につき最も遺憾に思ふことは事の因つて起つた其の當初から、政府、政黨、各會社、個人皆祕密療法を爲し、其の責任の所在を示さないことてある。今や清算の時期が到來した。若し不徹底の整理を爲せば其の禍根は遠き將來の國運に關するてあらう。

萬機は公論に決すべく、億兆心を一にして盛に經綸を施すべしてある。舊時の自由放任主義者のやうに、國家は必要な已を得ない害惡と思ひ、其の任務をなるべく狹くしやうとするのは誤てある。されど何事をも悉く政府の指揮監督に從はしめやうとするのは他の過誤に陷るものてある。政府のなすべき仕事は多くある。されど從來の經驗よりして官吏は事業經營の能力劣るのを通例とする。若し政府が諸種の事業を指揮監督するとせば徒らに他の重要なる政務を澁滯せしめ易い。又政府と密

接の關係あるもの程不健全となり易く、そこに伏魔殿が生じ易い。されば經濟社會の病患を未然に防ぎ又之を治療する爲には只單に政府の監督を嚴重にするだけでは足らない。又政府自ら事に當るべきてはない。先づ自然療法を行ふべきてある。

何をか經濟社會の自然療法と云ふ。先づ日光をして暗所を照さしめ日光消毒を行ふことてある。それは各方面の達識の士を集め、病弊の存する箇所を調査せしめ、之れに對する意見を年々政府が刊行することてある。其の意見書には必らず少數者の意見を併せ掲載し、其の調査は抽象的ならず必らず具體的なるを要する。かくすれば國民は經濟社會の病患の那邊に存するかを知り、之に對して始めて健全なる輿論は生じ社會の腐敗を防ぎ得る。民は依らしむべし、知らしむべからずとは舊式の政治家の格言てある。昭和の政治は宜しく知らしむべし、依らしむべからずてなければならない。光をして徧く照らさしめよ、是改革の第一歩てある。（經濟往來二・九）

眞理とは何ぞ

イエス答へ給ふ『わが國はこの世のものならず』。爰にピラト言ふ『さらば汝は王なるか』イエス答へ給ふ『われの王たることは汝の言へるごとし。我は之がために生れ、之がために世に來れり。卽ち眞理につき證せん爲なり。凡て眞理に屬する者は我が聲をきく』ピラト言ふ『眞理とは何ぞ』（ヨハネ傳一八・三六以下）。

眞理とは何ぞ。眞理とは神を示し又神が其の創造し給へる宇宙萬物を如何に見給ふかを示すものてある。故に眞理を有てる者は神が宇宙萬物を見給ふ如く之を見ることを得る者てある。

神は光てある（ヨハネ第一書一・五）。彼は宛も太陽の如し。我等太陽の輝きにより太陽の存在を知り、又其の輝きにより地球上の森羅萬物を見得るのてある。太陽の光なからんか、我等は太陽其のものの存在を知らず、又萬物を知らない。その如く神

の光に照されて我等は神御自身及びその神の創造し給ふた萬物を其の本質に於て之を知り得るのである。之れ眞理である。之を得て我らは神と一致し、又永遠の生命を得る。『そは生命の泉は汝に在り。我等は汝の光により光を見ん』である（詩篇三六・九）

如何にして此の眞理を獲得出來るか。それは只神の獨子、主イエス・キリストを信ずることによつて可能である。イエスは言ひ給ふた『我は道なり、眞理なり、生命なり』と（ヨハネ傳一四・六）。彼を信じて眞理を得、眞理を得て永遠の生命を獲得する。それは彼こそは眞理にして且つ永遠の生命であり、彼れに由らざれば之れを得ることを得ないからである。彼は信ずるものに己が生命を與へ給ふ。彼を得たる者は卽ち神を得たのである。何の富かこれ以上のものがあらうか。（四・六）

胃の腑と靈魂

「人とは其の食へる物其自身なり」Man ist was er isst と言うて有名である唯物論者ホイエルバッハの所說はマルクスの唯物史觀に貢獻した。彼の著「基督敎の本質」に於てホイエルバッハは言ふ。神が己の像に肖つて人を創造つたのではない、人が己の欲望を滿してくれるやうな神を創造るのであると。昔ギリシヤのクセノフアネスは若し馬や牛が神を畫かば自分の像に肖せるであらうと言つたが、そのやうに、衣食に窮した者は肉的の神を創造り、衣食に足つた者は更に高尙なる神を創造るとのことである。

彼等は英國の經濟學者バンフキールドの言ふやうに、人は先づ低級の欲望を滿すに從つて高級の欲望が次第に心のうちに生ずるものであると考へる者である。それ故に何よりも先に胃の腑を滿さしめよとである。こゝに於てか產業立國と社會政策と

が現代政治の要諦となり、危險思想は生活不安定より生ずる黴菌と見られるやうになつたのである。

然れども貧者果して靈と眞理とを以て眞の神を拜し得ないか。富者は果して靈と眞理とを以て眞の神を拜し得るであらうか。

否、天より聲あり、「これは我が愛子なり」と稱へられ給ふたイエスは饑え給うた。自ら宿る處なく「梶緒絶えたる小舟の如し」と云ひ「他人のパンの如何に鹽辛きか」を細さに知つたダンテにして神曲は成つた。失明困厄の裡に失樂園を草したミルトンは生前其の稿料僅に十磅を得たのみであつた。鑄掛屋の子にして、然かも幽囚十數年、始めてバンヤンの天路歷程は書かれた。此等は人類の最高最純の精神的產物であり、先づ衣食足つて後成つたものではない。古來學者宗敎家藝術家にして後世名を成したる者の三分の一は先づ逆境と戰ひ、細に患苦を嘗めた者であると云ふ。現代人は安樂を求めて、最も大切なる者を失ひつゝある。(四・二)

基督敎的社會觀と現代社會觀

現代は社會組織に大變革の行はれつゝある時代である。宗敎改革により創められた革命の流は近來益々加速度を增し、今や怒濤天を打つに至つたのである。然し乍ら現代に於ける現存社會組織に對する反抗の直接の起源は宗敎改革になくして、佛蘭西革命にある。若し個人の名を以て之を代表せしむれば、信仰的なるマルチン・ルーテルになく、感傷的なるジャン・ジャック・ルソーにある。

ルソーは資本主義的社會の確立前いち早く人類社會の組織をその根柢から變革しやうとした。彼の主張した新社會組織の基礎は人類愛であつた。彼の理想の社會は弱者に對する憐憫を基礎とする社會であつた。彼は社會に於ける被壓者、弱者に同情する餘り、此等の人々の不幸の責を其の人に歸せず、之れを不幸に陷れ、不幸より救はない社會國家の責任であるとした。そして現代人は皆ルソーの弟子である。

彼らは人々の罪惡、不幸は一切社會が之を犯さしめ、社會が陷れたものであつて、之らは眞に憐れむべきものであり、決して責むべきものではないと考へる。カール・マルクスとロシヤの共產主義も亦之と異なるところはない。只彼らは憐憫が無制限に行はれば反つて社會的障害となり易きことを知るが故に、社會科學の知識により之を抑制して居るだけである。其の本質が感傷的憐憫主義であり乍ら、他方之を抑制するところに彼らの矛盾がある。

『信仰のみによりて義とせられる』と主張する基督教の社會觀も亦憐憫が其の根柢である。されどその憐憫は現代人の如く感傷的でない。あくまで憐れまるべき人々の道德的責任を問ふのである。彼らが己が罪を自覺し、キリストに由りその罪が赦されたことを信じたる時始めて憐憫が無制限に行はれる社會である。こゝに現代無神論的社會觀との著しき相違がある。(五・九)

士族の商法

我國の產業界は異常の不景氣に沈衰し、失業者は增加し、多數の學校卒業者は就職することを得ず、此等の者は街頭に彷徨して空しく職を漁りつゝある。彼等の將來はどうなるであらうか。小人閑居して不善をなすと云ふ。失業の怖るべきことはこゝにある。働ける身を以て働くに仕事なく、衣食に窮しつゝ、不安、焦慮、落膽、意氣銷沈の中に其の日其の日を空費するうちに、勤勉の風は廢れ、自暴自棄となり、日頃覺えた修練は忘れ去られ、懶惰が其の習性となる。其の子孫の敎養も亦不可能であつて、人間としての全生活の程度は低下し、國民生活の標準はそれだけ落下する。

今や此の失業者をどうするかが刻下の緊急問題となつた。之れがため職業紹介所を作る位では何の役にも立たない。失業者をなくするには一般に產業が振興して、

それらが人々の勤勞を需要するに至らねば如何とも致方がないのである。されば如何にして産業界の景氣は回復するか。

此の事に關し朝野の二大政黨は緊縮政策と積極政策と云ふ標語の下に互に爭つて居る。緊縮政策の主眼とするところは財政を緊縮し、又國民に消費を節約せしめ又産業の合理化を行はしめ、之れにより生産費を引下げて以て産業界の振興を計らうとするにある。積極政策の主眼とするところは先づ國民の需要を盛にし、之れに應ずべき事業の振興を計るに在る。如何にして國民の需要を盛にし得るかと云ふに、彼らは國民經濟中の最大消費者である政府の財政を緊縮する代りに、其の支出を多くすること之れであるとする。積極政策は借金政策である。借金による景氣は手取り早いが永續しない。反つて後に其の禍を遺すものである。積極政策よりも緊縮政策の方が穩健であることは云ふまでもない。然し乍らそれは一時需要の減退、事業の縮少沈衰を表すものであつて、此の政策によれば一時は不景氣となり、失業者は反つて增加こそすれ、之れを減少することにはならない。

こゝに於てか、緊縮政策を採る政府は此等の失業者を救濟するため不急の事業を起し之に職を與へやうと計畫して居る。これ右の手で産業の合理化、緊縮政策を行ひ失業者を出し乍ら、左手之れを救ふため、それと反對な不急卽ち不合理の事業を起すのであつて此の位矛盾はない。且つ又右手で整理された失業者は概して高級のものであり、左手で之を救濟するための職は下級の勞働者のよく爲し得るものである。若し前者を以て後者にあてんとするならば大なる不合理化である。

されば朝野二大政黨には失業に對し適確なる策なしと云はねばならない。社會主義者はこれを見て揚言して曰く、現資本家制度の存續する限り、失業者が次第に增加するのは必然であつて、結局日本をソビエートロシヤのやうにせざれば解決の道なしと。然し乍ら我國がロシヤのやうになつたならば民は鼓腹擊壤して樂しむであらうか。目下ロシヤには第二の大革命が行はれて居る。それは十年前に行はれたも

のより更らに廣大深刻なものであつて、サルキと稱せられ、比較的裕福である中農階級が今や悉く其の所有の土地、農具、家畜を公有として沒收せられつゝある。其の方法は三日の豫告の下に所有物一切を現狀のまゝ殘し置き家を去らしめるのである。ある村々ではこの豫告を與へる時には所有物を隱匿する惧があるため、何の豫告すら與へないで住みなれし家より着のみ着のまゝに放逐するのだそうである。サルキに屬するものは牛三頭以上又はそれと同等の價ある財產を有てるものであつて、全農民の八割五分に相當するとのことである。

ロンドン・タイムスは之れを報じて云ふ。ロシヤは嘗てアレキサンデル二世に至り農奴を解放したが、今や全農民より悉く所有を奪ひ之れを他の形式の下に再び農奴の昔に歸へしつゝありと。これが我國の共產主義者の理想だとすればそれは沙汰の限りである。我國三四十萬人の失業者救濟としては餘りに高價なる代價である。現代の資本家は勞働者を奴隸とし、その勞力を掠奪して居る。然し乍ら如何なる資本主義國もロシヤ程の掠奪は爲さない。嘗て佛蘭西革命の時ローラン夫人は斷頭臺に立つて自由の女神の像を指して絕叫した『あゝ自由、如何なる罪惡がお前の名によつて行はれるか』と。同じ事がロシヤでも言ひ得られる。

社會主義で最も漸進的なのは英國勞働黨のそれである。此の黨は昨年の總選擧で遂に第一黨となり、第二回目の內閣を組織するに至つた。何れの國でもさうであるが、英國でも每年冬期殊に二月の失業者數が最大である。然るに勞働黨の領袖トマス氏は昨年勞働黨組閣に際し揚言して云つた、今年の二月の失業者數はきつと昨年より減少すると。そして二月が來て見て、失業者總數百五十二萬人（我國の四五倍）、昨年より反つて十八萬人の增加を示した。なる程勞働黨の根據地である炭業地方では失業者は減少した。然し乍らそれだけ紡績地方では增して居た。

政府のする事はこのやうなものである。政黨は政權を取れば男を女にする以外の事なら何でも出來ると云ひ、國民はやすやす彼らの甘言に欺かれて失望するのであ

る。これは我國に限らない。由來人々が政府に依賴し過ぎることが政治の腐敗、産業の不振の根本原因である。この依賴根性のある限り我國でも産業界を覆ふ暗雲は一掃される氣遣はなく、現下の大問題である失業問題は解決されない。

一體産業は誰が行ふのであるか。それは政府ではない、國民各自である。此の産業の當局者が確かりせずしてどうして産業が振興するであらうか。産業を行ふに最も必要なものは他人の補助でなく自分の力である。これに當る責任者が精力旺盛であり然かも誠實、遠き慮あり然かも大膽、日々變動限りなき狀況の中に在つて一定の方向を決し、着々その方針を實行するの能力、多くの人々を統帥して適材を適所にあて、且つその全幅の信賴を得るの品性、これらは政府が供給し得るところではない。然かもこれがなくば事業は立ち行かない。

かゝる事業主が經營する事業は解職者を出すことが少ない。又如何なる事業にあつても優秀なる使用人は解雇せらる危險が少ない。失業問題は政府の問題でなく、國民各自の問題である。政府のなし得ることは此の國民の産業精神の發揮を奬勵するか、又は妨害するかの二者の一つである。而して政府が補助金を支給し、産業を保護するのは産業を奬勵する如く見えて反つて國民をして依賴心を起さしめ、其の保護に安ぜしめ、國民精神を萎靡せしめるのである。政府によつて失業問題を解決せんとするのが根本的の誤謬である。政府に失業對策のないことが當然である。

抑も失業問題の解決は産業上景氣の挽回を待つ外なく、然かも産業上景氣の挽回は何よりも先づ前途に希望を有つ事から來るのである。前途に不安のある間は決して事業は起らず、景氣は回復しない。然らば如何にせば前途の不安を除き、確實なる希望を有ち得るか。それは決して政府の保證、保護に依賴する事ではない。國民各自の胸中に一大理想輝き、現在の苦難を突破する勇氣が湧き出た時、此の希望が生ずるのである。この大理想は物質的繁榮以上のものでなければならない。何となれば現在の物質的不況に堪ゆる勇氣は、物質以上のものからでなくては生じないか

らてある。されば現在の産業沈衰時代に在つても、又今後の産業界に於ても、今迄ての産業指導精神ては最早之れを如何ともなし得ないのてある。そして私はこゝに新なる産業指導精神を主張する。それは『士族の商法』てある。

徳川幕府倒れて明治維新となり、食録を離れた多數の武士は生計を得るために商業を營んだが、氣位ばかり高く、事務に疎く、利害に魯鈍てあつた爲、殆ど皆失敗して「士族の商法」と云ふ諺が生ずるに至つた。かくして我國に於ては士道と商道とは兩立せざるものの如く思はれ來つた。然し乍ら我國がその産業を振興し、今後經濟生活上新なる原理を世に提供して世界人類に貢献することありとせば、それは人々の捨て去つたかの士族の商法がそれてあると私は思ふのてある。

『士族の商法』とは先づ第一に私利の代りに公共の利益を目的として産業に從事する事てある。儲かるか儲からぬかを考へる前に、何が社會のために必要てあるかを考へることてある。そして昔の武士が身命を献げて君國のために盡したやうに献身的に産業に從事することてある。『士族の商法』の第二は昔の武士が其の武技の優秀を誇りし如く、各自其の製品の優秀を誇りとする事てある。第三は昔の武士が敵と戰ふに當り、名譽を重じ、卑怯にも敵の寢首を掻く如きことなく、必らず正々堂々と名のりを擧げて戰つたやうに、各事業家が堂々と競爭をなし、又或時は公明に協調し、又弱きは之れを扶け導き、時には自己を犧牲として他を生かす事てある。此の武士的理想主義、乃至精神的自由主義によらずして我國は勿論世界の産業界は更生の道はない。我國は最早西洋の科學的物質主義、乃至經濟的合理主義に飽いた。今や新たなるものを己の内から出すべき時期が到來したのてある。

然るに現代に於て世界一般に個人主義の不信、政府萬能の思潮盛となり、今後産業は各人の自由に放任することなく、社會の統制の下に、各個人の行動を制限すべしとの主張行はれ、社會主義が隆盛となり來つたのは何のためか。前記の『士族の商法』と云ふ如きは、眞に實行不可能なる空想てあると認められるからてある。そ

してそれは間違なき事實である。現代の社會に於て、現代の人生觀、世界觀を以てしてはそれは明に實行不可能である。それが實行不可能なるが故に、今や世を擧げて産業の不振、失業の暗黑に襲はれて居るのである。

なぜ『士族の商法』は實行不可能か。何故に此の武士的自由主義が不信用であるのか。それは之れを實行し得る背後の力が現代人には存在しないからである。背後の力とは何を云ふか。それは信仰である。實に現代の世界の病患の源はこの信仰の喪失に在る。神なし、靈魂なし、從つて來世あるなし、あるものは只現世と胃袋とのみ。此の地上の生活を出來る限り樂しく、飽滿に過さんとの願望のみ。それ故に人々は皆目前の利益を追ひ、我利我慾を盛にし、他人をおし退けても自ら日向に出やうとする。此の時に當り信仰を基礎とせずして自由主義を說く程時世に迂愚はない。寧ろ各個人の行動の自由を制限し、財産の私有を禁じ、之れを公有とし、事業は須く國家的見地から之れを統制すべしと云ふ社會主義こそ現代に最も適切のものと認められるのは當然である。然るに若し各個人にして眞に自己の利益を忘れ、社會公共のために盡さうとする念慮あらば、萬事規則づくめの御役所式社會主義に勝ること萬々である。自由主義、個人主義の缺陷はその公共心の缺乏、其の背後の力なる信仰衰弱に在る。

如斯自由主義の凋落は信仰の基礎を喪失したことから來り、之れに代るものとして社會主義が提唱せられるに至つた。今や世界人類の進みゆくべき途は二つあつて、二つしかない。それは自由主義か社會主義かではない。實に社會主義か信仰主義かである。二者共に相容れない。これかあれかである。見よ、現今ソビエートロシアの盛に實行しつゝある排神運動の實際を。彼らがその社會主義を實行するに至り、如何に宗教が邪魔になるかを明かに認めたからである。

彼らの排神運動のポスターを見ると、巨大の十字架を多數の裸體の勞働者があえぎあえぎて荷なひ、キリストはそれを知らぬものゝ如く懷手してそれに先立ちゆ

く、一人の資本家は此等の勞働者の荷つて居る十字架の上に乘つて此らの勞働者を操縱して居る。又他のポスターには數萬の民衆が空中のキリストを目當てに山坂を登りゆく、その絶頂は斷崖絶壁てあつて、上を仰ぎ見て足下を見ない彼らは遂に此の斷崖から雪崩のやうに墜落する。其の下には資本家が大きな口を開いて、此等の民衆を悉く呑んて居のてある。由來社會主義者は道德の絶對性を認めない。之れを古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざる如き道德は彼らにはあり得ないのてある。

こゝに至つて世は截然二分される。キリストかアンチキリストか之れてある。キリストの十字架に神の永遠の義を認め、キリストに賴つて立つか、各人自己の胃の腑に仕へて之れを神とするか之れてある（ピリピ三・一九）。現代人はキリストを棄てた。されど何ぞ知らん『家造者（いへつくり）らの棄てたる石は、これぞ隅（すみ）の首石となれる。これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり』てある。（五・六）

鈴木馬左也翁

最早十數年前のことてある。私は一風變つた就職難に苦しんだ。私の苦しんだ就職難は私が學校を卒業する前、何になつても官吏と實業家とにはなるまいと決心したその事に因つた。官吏と實業家とを外にして自分は何になり得るか。自己の短才にして魯鈍なる性質を知悉せる私としては途方に暮れた。私は日本の國の改造は小學教育より始まると思つて、小學教育研究の爲め小學教員にならうと思つた。

今から其の事を考へて見て其の當時の私は餘程空想家てあつた。只私をして飽まて現實の世界に住まねばならなくせしめたものは私の境遇てあつた。私は無產者の家に生れ、父は早く世を去り母の手に育てられた。それ故に私は早く職に就き自活せねばならなかつた。只私は生きんが爲めに働くだけては滿足が出來なかつた。誠實に働かんが爲めに生きたく思つた。只理想のみあつて實際を知らざる私の眼には

官吏と實業家程、私の理想に反するものはなかつたのである。

此の煩悶を抱いて學校卒業後數ヶ月を何の爲すことなくして過した。同窓の者は昨日の制服を脱ぎ捨てゝ背廣服を纏ひ、意氣揚々と或は官署に或は會社に通勤する有樣を見て羨望を感じた。されど私の官吏と實業家に對する偏見は牢乎として拔き難くあつた。

一日私は内村鑑三先生を訪ねた時、何をするつもりかと尋ねられて、私は何になつても官吏と實業家とにはならないつもりでありますと答ふるより外なかつた。其の時先生は「そんなことを言つて居るが、君の一番いやだと思ふそこにやられるぞ」と云はれた。先生の此の預言は端的に的中した。私は先づ實業界に入つた。それから其の後そこを出て官吏になつた。それと共に私の最初の志も亦期せずして成就した。大學の講義の際筧博士が「諸君は青年時代に出來るだけ大きな野心を抱き給へ、假令其の形式は同一でなくとも其の野心は後年きつと成就する」と云はれた事を尚

記憶する。人は私の野心を「つまらない野心」だと云ふかも知れない。それにも不拘私の最初の志を遂げられて遂に實業家にも官吏にもなれなかつた。

私の就職難は多くの人々の問題となつた。ある日矢作博士は私を住友總本店（今の住友合資會社）の重役湯川氏に紹介された。此の面會は確に私をして實業家に對する偏見を打破するに效果があつた。私は實業界に働くも無意味ではないと思つた。只私は假りにこゝで働くもそれは金がほしいからでないことを明にし度く思つた。それ故矢作博士に次の三ヶ條の條件を理解し承認してくれる人あらばどこででも働き度いと書き送つた。

一、月給はなるべく少なきこと。

二、禁酒を認めらるゝこと。

三、日曜日出勤を强制せられざること。

此の條件が多少奇拔であつた爲めかどうかは私の知る處ではないが、數日の後既

に故人となられた當時住友總本店の總理事鈴木馬左也翁から面會し度いから大阪まで來てくれとの電報を受取つた。私が彼を知るに至つたのはかやうのわけであつた。

此の電報を見た私は住友に職を求める意思でなく、一老先輩に道を聞くつもりで大阪に赴いた。時は八月の始め頃であつた。數々の談話が總理事及他の二理事と私との間に交換された。私は自分が基督信者であつて、基督信者なる故に他の人々には虚心でなし得る事にして自分には出來ないことがある旨を語つた。之に對して彼は基督敎には善い處と惡い處とあると答へられた。私は善い處は別に聞かなくてもよろしい、惡い處はどこですかと尋ねた處、「それは餘りに個性を主張し過ぎて遂に國家を忘れるに至ることである」と答へられた。

此の答程私に意外なものはなかつた。私は之に對して最も率直に云つた。「私の實業界に入ることを躊躇して居る唯一の理由は現今の實業家なるものは私利を重んじ過ぎ遂に國家の利益を忘れるが爲めであります」と。當時シーメンス事件なるものが起つて實業家と政治家との行動につき社會全體が大なる疑惑を感じて居た時であつた。私の飾らざる言葉は故翁の胸を突いたらしく思はれた。彼は實業界の現狀を慨嘆された。そして住友の事業經營の精神を述べられた。かくして會談數時、私は別れを告げて一先づ應接室に入つた——私の心の中に別に住友に入り度いとの希念の生ずることなしに。

應接室は大廣間を隔てゝ總理事室と相對して居た。夏のこととて扉は總て取り去られ、前後に動く小さき簾子が僅に室の入口に取付けてあるばかりであつて、内部より大廣間の動靜は明に觀取し得られた。今し、彼は左脇に古びた折鞄を、右脇に洋傘をかいこみ、自分の室を出て、重々しい歩調で大廣間を階下の玄關の方へと出て行かれるのが見えた。彼は數歩の後何思ひけん突如立ち止まり、踵を回すと共に私の居る應接室の方に來り、簾子を開き、帽子を脱し、丁寧に「一足お先に失禮します」と挨拶して立ち去られた。私は其の瞬間美事に彼の捕虜となつた。思ひ見よ、

職を求めつゝ然かも不遠慮な學校出たての青年と我國實業界の大立物の一人たりし彼、然かも恭謙此の如き彼。

私は長々と自分のことを書いた。それは自己を語る爲めてはない。如何にして私如き實業家嫌ひが彼によつて實業界に入つたかを語らうとしたまててある。私の實業界に居た年月は短く、且つそれは一下級書記に留まつて彼により特別に榮達はしなかつた。又彼と接する機會も餘り多くはなかつた。又我國の此の方面の多數の人物に接觸することを得なかつた。私の見る處はかくの如く狹隘である。それにも拘はらず私は彼を我國現代の大なる一人物として、又代表的實業家の一人として尊敬するものである。それは何故か。彼が何よりも先づ誠實の士であつたからである。

私はこゝに彼の才能を語らうとしない。勿論彼の短所を批評しない。彼の誠實を述べ度い。錯雜紛糾せる社會に於て多數の人を統御し、巨大の資本を運轉して事業を經營指導する者に才能の必要なることは云ふを俟たない。されど才能のみにては人は心服しない。事業は永續しない。人の長たること、事業を指導することの其の奥底に一片の誠實なくして果して其の事業がいつまて續くてあらうか。

私が學校の窓より見たる社會に於て實業界程不正不義が行はれる所はなく、金のためならば親も子もなく、人と人との關係は只債權債務の關係以外にないものと思つた。然るに私の實業小僧時代、ある日株式市場の實際を知り度く大阪の有名なる一株式仲買店を訪問したことがあつた。店主は實に百戰練磨の士であつた。種々此の社會の內情を話して呉れた末私にこう云つた。「此の社會位惡い社會はありません。世間では誰かゞ困れば其の親戚朋友が相寄つて互に助け合ふのが普通てありますが、此の社會てはさうてありません。若し仲間の一人が非境に陷ると見るや、皆て寄つたかつて之を倒して仕舞ひます」と。其の事實は確に存在する。されどかく云ふ其の店主の店が世間の信用を得て繁昌するのは彼の稀に見る才氣のみによるものてはない。反て彼自ら云ふ如く一切を投げ出して大膽に顧客を信用することによ

り獲得したる信用に在ると思はれた。

私の友人で永く某株式取引所に關係して居る者が私に言つた。「自分が十數年の觀察によつて得たことはこうてある。株式市場に於て永く事業を繼續し得た者は皆誠實な者のみてあつて、誠實こそ事業永續の鍵てあることを知つた。才智の如きは云ふに足らない」と。機敏が總ててあるかの如く見える相場師に於て既にそうてあるのを見ば、マシュー、アーノルドが「人生の四分の三は正義てある」と云ひ又「正義が維持せられるは我等の力ではない、永遠なるものの力てある」と云へるは眞理てあると思ふ。此の故に私は實業家としての故翁の他の方面を述べずして專ら此の方面を述べやうとするのてある。

ある夏の一日、御殿場の別莊に彼を訪ねたことがあつた。其の時彼は田舍の百姓おやぢのやうな風て尻端からげて、露滋き自然のまゝなる廣い庭園をあちこちと案内し乍ら私に述懷した。「別子の銅山は住友の事業の基礎てある。此の銅山の經營如何は全事業に影響する。然るに彼處には所謂鑛煙問題がある。如何に此の問題を解決するかにつき心勞し、或時は夜も眠られぬことがある」と。

銅鑛を精錬してそれから製銅を得るには、どうしても亞硫酸瓦斯を發散せしめなければならない。然るに此の鑛煙は農作物に大害がある。銅鑛の精錬所の附近の山が悉く丸裸となるのはこれが爲めてある。嘗て渡良瀬川の鑛毒事件は今尙記憶に新てある。別子の銅山ては精錬所を瀨戸内海の一島に設けたけれども、風向によつては其の煙は蜒々たる一大雲柱となつて四國の一角を襲ふのてある。一つの事業が繁榮することにより、之に關聯して多くの事業が繁榮し、多くの人々が其の益を蒙るものてある。それと共に其の反面に他の事業が害を蒙り、他の多數の者が苦しむ。

波路を行くは我のみならず、
海原遠く漕ぎ出づる、
津々浦々の百千舟、

我に追風吹く時は、
逆波高く捲り來て、
磯根に觸るゝ舟もあらん。（内村先生著愛吟より）

これは只資本主義を排するだけては解決が出來ない問題てある。されど此の事は一事業の立場だけては尙更解決出來るものてはない。社會的、公共的見地よりして解決せらるべきてある。それと共にこれは誠實に其の事業を愛してのみ始めて解決の曙光を得る。彼は此の問題に苦しんだのてある。

彼は語つた。「自分は此の問題て苦しんて居た時、自分の舊友てある北條君がある西洋の小話を聞かして呉れた。それはある煙突掃除夫が高い煙突の頂上に登り掃除を爲し終へて、そこから降りやうとする時、つたひ下るべき綱が外れて地に落ち、自分は降ることが出來なくなつた。下に居るものは只あれよあれよと云ふばかりてあつて何の施すべき術も知らなかつた。然るに此の掃除夫の妻は夫を想ふ一心から遂に一つの方法を發見した。それは彼女の夫のはいて居る靴下の絲をほどいて之を下に降ろすことてあつた。其の絲が地に達するやその絲より稍丈夫な絲を其の端に結びつけて之を再び頂上に引上げしめた。そして次第次第に其の絲の太さを增し加へ、遂に丈夫なる綱を引上げ得るに至つて、此の綱の一端を煙突に結びつけ、これを傳つて遂に安全に大地に降り立つことが出來た。これは誠實に其の夫を愛したる妻にして始めて考へ得たことてある。自分も亦己に託せられたる事業につき誠心誠意、以て最善の方法を考へ度い」と。丁度其話が終つた時、北條博士が突然上京の途中だと言つて訪ねて來られたのも奇妙な出來事てあつた。

彼はまた或る日私に語つた。「人の生涯程數奇なるはない。自分は元官吏てあつた、そして先輩として白根專介氏の指導を受けた。然るに住友て切りに來よとのことてあつたが白根氏は之に不贊成てあつたため自分は非常に迷つた。けれども住友よりの懇切なる招き否み難く、遂に意を決して住友に入り、幾何もなく海外を視察

し歸途上海で白根氏の逝去の報に接した。白根氏なき後の自分は若し官吏たらば多分故大浦子に直屬し、山縣公の輩下に在るべきてあつた。然るに大浦子と自分とは其の性行が合ひ相てない。山縣公は至誠只一意君國に盡すの人と思つた。然るに近來公に對して失望を感ずることも少なくない。自分が若しあの時住友に入らずして依然官吏てあつたならば、多分今は日向の片田舍て百姓をして餘生を送つて居たかも知れない。あの時住友に入つた故に、自分は幸に自己を曲げることなくしてやつて來られた。住友は我國關西の實業界に於ける何者かてある。私はその住友に在つて何者かてある」と。彼の面目は此の言の中に躍如たるを感ずる。

彼の一生の企圖は立派な大學を建て所謂「天下國家」を以て任ずる士を養成するに在つた。然るに其の事は遂に實行を見ずして此の世を去つた。一言にして評せば、彼は會社を修道場とした一禪坊主てあつた。彼は實に實業家ならざる實業家てあつた。それ故に代表的實業家となつたのてある。（經濟往來二・四）

平野國臣と尊攘英斷錄

昨年の晩秋菊花薫る頃、私は西國をさすらうて一日福岡市西公園の岡の上に立つた。脚下に打ち寄する白波を見、茫洋たる筑紫の海を望み、俯して歩を移し松林を辿る時、偶々一巨像の立てるに會ふ。仰げば偉丈夫の野袴をはき、草鞋を穿ち片手に扇子を携へて、遙に東方を睥睨して居た。然も其の毛深き眉と、爛として輝く眼との間に無限の憂愁を含めるを見て、私の心は強く之に惹かれたのてあつた。それは平野國臣の銅像てあつた。彼何人てありしか、私は彼が維新の志士の一人てあり、僧月照が西郷南洲と共に薩摩の海に身を投じた時、其の舟中に居た事を知つて居た以外何をも知らなかつた。私の彼に對する興味は實に此の時から生じたのてあつた。最近小閑を得て彼が遺稿を讀み、聊か彼が爲人と其の維新の先驅者としての奮鬪的生活を知るを得た。

國臣

一　彼の生涯

春ならで先づ咲く梅の一朶の
深き色香を知る人ぞ知る

彼は文政十一年筑前福岡市外に生れた。彼の父は幼より祖父の業を厭ひ、武を嗜み甚だ上達した。之が爲めその父母は藩の足輕平野某の跡を繼がしめた。後遂に士分に上る事を得た。その子女六人あり、國臣は次男であつた、家貧しくして子多く、彼は充分なる教育を受くる事を得なかつた。十四歳の時父の親友小金丸家に養はれ、十八歳普請方の屬吏となつた。これよりして彼は諸所に遊歷するの機を得たのである。彼は又此の頃から感ずる所あつて、身を國學の研究に委ねた。當時福岡藩に於ては頗る國學が流行し、從つて勤王思想も亦萌芽を發して居たのである、彼が師事した富永某の影響の如き、彼が一生忘るる事を得なかつたものであつた。彼は斯くして古典と詩歌との研究の裡に二十六歳の春を迎えたのである。

此の年の冬は藩命によつて江戸に居つた。實に此の年は啻に彼が一生に取つて記念とす可きのみでなく、我國の歷史ありて以來、特筆大書す可き年であつた。嘉永六年卽ち米國水師提督ペルリが四隻の軍艦を率ゐて、突然我浦賀沖に來り、通商互市を要請した年であつた。これ實に我國にとりては思ひもかけぬ事であつた。かの天草の亂以後、我國は和蘭を除く外全く國を鎖し、外界と絕ち世界の推移を外にして內安逸を貪り深き眠に入りしもの、此の年始めて黑船に驚かされ、あはてゝ目覺めし時は旣に已に英・米・佛・露・の勢力が黑潮の流湧くが如くに東洋に押し寄せて來て居た頃であつた。只北邊と云ふ勿れ。又對島と云ふ勿れ。我が邊彊は之れ悉く累卵の危に瀕したのであつた。

然かも幕府は愕然爲す所を知らず、其の施策屢々謹愼と誠意とを缺いた。開國か攘夷か、之れ朝野識者の大問題であつた、幕府は只一時の安を偸むのみ。各藩亦多くは自國の安を求むるに汲々として國家の危急を思はなかつた。此の時であつた、

國臣が一身を捧げて國事に盡さうと決心したのは。其の後長崎に至り外人の暴戾を見ては憤慨抑ふる能はず、爲す無き幕府を倒し王政を復古し舉國一致以て攘夷を斷行せむと欲した。

之には先づ國家を統一しなければならない。國家の統一は討幕が先決問題である。彼は之が爲め各藩の志士と交り、養家を去り、親戚朋友に疎んぜられ、藩に容れられず、自ら法を犯して藩を脫し諸所に潛在する事數年、遂に文久元年(年三十四歲)其の著す所の策論一篇を懷にして薩州に入り藩主に獻じた。之れ卽ち尊攘英斷錄である。されど薩藩又濫に之と同ぜず、理想は彼が胸中に燃ゆれども施すに詮む術もなし。

我胸の燃ゆる思にくらぶれば、
煙はうすし櫻島山。

されど一度思ひ込みし丈夫の志は奪ふ事を得ない。彼は諸方の同志を糾合してその方策を實行しやうとした。翌年春、同志續々上阪し京阪地方で事を成さうとしたが機熟せず、彼は捕へられて空しく福岡の牢獄に投ぜられた。そしてそこでつぶさに艱難を嘗めた。彼の獄中に在る、玄海より吹き來る寒風にも火氣なく、終日端坐すれども筆硯すら與へられず、只僅かに紙を撚つて文字を作り、其の詠んだ歌を書き殘した。終日無爲無聊に苦しみ、坐する所の疊の絲を抽き取つて板壁につけ、竹屑をこまとして一弦の琴を造り、これを鳴らして僅に鬱を散じたのである。

一筋のかひなき音をたのむかな、
詫びしきほどの心すさびに。

獄吏來つて獄中音曲を弄ぶ可からずとて、これをすら沒收し去つた、

しのび音と思ひし琴のねを高み、
いと珍らしく鳴りにけるかな。

何等のユーモアーであらうか。彼の志は遂に成らずして命は旦夕に迫つた。彼の

遺憾限りなかつたてあらう。獄中又母の訃に接し悲慟甚だし。又屢々父祖の國卽ち藩のことを忘れ之に迷惑をかけるとの非難を蒙つた。それがため歌つて言ふ。

忘れても我がかそいろの國の爲め
あしかれとしは露思はなくに。

然るに藩論は彼を目して重罪人となし、極刑を課しやうとした。預言者は常に其の故郷に於ては貴ばれない。然かも其の死するや、之をあがめて以て鄕黨の誇となし、銅像を建て之を『顯彰』するのである。此の頃眞に彼の心事を知つたものはたつた二人しかなかつた。然かも其の一人は女であつた。先なるを岡部某と云ひ、後なるは野村望東尼であつた。望東尼獄中の彼を慰めむとて歌一首を贈つた。

たぐひなき聲に啼くなる鶯は、
籠にすむ憂きめ見る世なりけり。

これを受けた彼れは恐らくは千載知己を得た想がしたてあらう。彼の述懷に、

春ならで先づ咲く梅の一朶の、
深き色香を知る人ぞ知る。

誠に先覺者の苦しみと喜び此の一首の中に在る。

偶々朝旨一道の好音を齎して來り、國臣特赦を蒙り約一ヶ年の後獄を出る事を得た。獄を出づるや幾もなく上京の命を受け、これより約半歲の間は彼が一生中最も得意の時であつた。其の發するに臨み、

海山にひそみし龍も時を得て、
けふは雲井に立ちのぼるなり。

身は西邊一介の浪士よりして學習院出仕を命ぜられたのである。然れども彼の得意時代はその短き生涯の如く短くあつた。

彼が京師に在ること數月、維新史上に有名なる大和行幸、攘夷親征の詔勅は煥發せ

られた。之れ彼が歡喜の絶頂であつた。然かも朝議忽ちに一變し、討幕黨は勢力を失墜し、佐幕黨勝利を得、此の結果は七卿落となり、大和に於る國臣の同志の擧兵となつた。彼自身此の政變と共に其の地位を失ひ、彼の議論は容易に行はれなくなつた。爰に於てか、彼は同志に推され、大和の擧兵と相呼應する爲め、但馬に於て七卿の一人を奉じて事を擧げたが失敗し、此の年の四月、獄を出て、六ヶ月目に再び豐岡の獄に繫がれ、更に姫路の獄に移された。藩の彼等同志を遇する事尋常の盜と異ならず、檻房の汚穢に堪えずして人々藩の不法を鳴らした時、國臣獨り歌ひて、

孤きてもむしろにねても大丈夫の
日本魂なに穢るべき。

やがて雨を冒して京都に護送せられた、筑藩顧ず薩藩助けず、同志諸方に奔走すれども力及ばず、遂に禁門の戰のありし日、志士悉く窓外より槍にて突き殺された。彼も亦其の一人、時に年三十有七歳、彼の辭世に

みよや人嵐の庭のもみぢ葉は、
いづれ一葉も散らずやはある。

龍鉄虎口寄二斯躬一。　半世功名一夢中
他日九泉埋骨處。　刑餘誰又認孤忠

思ひ見る、罪囚として、悲雨降りしきる京の街路を、獄舍に引かれた其の時の彼の心事を。嘗ては假令一時たりとも朝廷に出仕し、一身の榮譽を荷うて此の道を往還せしに、又其の誠意は一度は九重奥深く達した事もあるに。今は然らず、己が一生を國の爲め君の爲め捧げ盡して然も其の終る所只縲絏あるのみ、只白刃あるのみ。此の時の彼の心事はそも如何あつたであらうか。『慷慨悲憤に堪えざり』しならん。『刑餘誰か又孤忠を認めむや』と嘆いたであらう。或は又世は『空の空にして日の下に人の勞する凡ての勞苦は其の身に取りて何の益する所あるなし』、と悟つたかも知れない、されど彼の心決して歡喜に溢れはしなかつた。此の事を思うて、かのブラ

ウニングの名詩愛國者の一篇を誦し、其の最後の節に至る時、私は彼の一生を憐ま
ずには居られない。

*

薔薇なりき、薔薇なりき、總て道の上は、
マートルの花も交りて我が行途狂へる如し。
屋の上はゆるぎ、敎會の塔は燃ゆるかと見ゆ、
斯くも人々旗を持ちぬ。
去年のけふ此の日に。

*

今は屋上、人もあらず、
只足萎えし者たち窓邊に座せり。
そは衆人の認むる最上の觀所は
シャンブルの門邊か、それよりも尙
我が斷頭臺直下ならん。

*

行く道に雨降り、入らざるまでに
脊の縲紲(いましめ)兩手に喰ひ入る。
額には血のにじみ出たらむ、
思ひ〳〵に人石を投ぐれば、
今年の我が失策の故に。

*

かく我、ブレシアに入りぬ。かく我出ゆく、
勝誇れる世の人は倒れて死せり。
「なんぢ世に酬いられなば何の負ふところ

我にある」と神問ひ給はん。されど今、神代りて償ひ給へば、我更に安し。

"Thou, paid by the world, what dost thou owe
Me?" God might question; but now instead,
Tis God shall requite! I am safer so.

二　尊攘英斷錄

私は前節に於て彼の一生を簡敍した。これより彼の遺稿尊攘英斷錄について述べやう。彼が此の稿を起したのは筑藩を脫走し、廣く天下の志士と交つた際、偶々櫻田門外水戸浪士の井伊大老要擊事件に關係した事が藩に知れ、藩は其の禍の自己に及ばむ事を懼れ、脫藩の罪を以て彼を捕へやうとして百方彼を搜索した爲め、彼は之を避けて肥後天草に潛み、約半歲の間刻苦勉勵して著したものであつた。其の論旨は、薩藩の力によつて幕府を倒し、王政を古に復し統一せる國力を以て外人を追ひ攘ふのみか、更に遠く海外に遠征を企てやうとするに在り、其の論の急進的なる又た大膽なる、當時に在りては實に驚く可きであつた。彼に若し過ありとせばそれは彼が時代を多く出過ぎた事である。故に彼の論は容れられなかつた。然し乍ら其の後彼の理想は着々として實現せられ、今尙實現せられつゝあるのである。

此の稿の成つたのは文久元年國臣三十四歲の時であつた。これより先き幕府に於ては井伊直弼大老となるや、勅を得ずして外、英、蘭、露、佛等と通商條約を結び、横濱、長崎、函館、新潟、江戸、大阪、兵庫の諸港の開港を約し、內、尾張、水戸、越前の諸公に致仕謹愼を命じ、間部詮勝を上京せしめて、安政の志士を捕へ、在朝の重臣鷹司父子、近衞、三條の四公を落飾せしめ大に棘腕を振つた。然も其の翌々年櫻田門外の露と消え去つたのである。彼死すると共に、幕府の運命も亦決せられた。國臣の此の稿を起したのは此の頃であつた。內外多事憂國の至誠が凝つて先づ

討幕論として顯はれたのてある。

尊攘英斷錄は漢文て書かれて居る。彼は國學者てあつて漢學者てはなかつた、故に彼の漢文なるものは一種獨特のものてある。然しこれが反つて彼の至誠を感ぜしめるのてある。立論數萬言、便宜之を大別して國內統一策及對外政策の二とする事が出來る。更に國內統一策を分ちて討幕の理由、時期及方法の三とし得る。

彼は先づ何故に幕府を討つの必要あるかを、明白に憚る所なく論じて。

謹觀天下之形勢也。西洋缺舌之猾夷。陸梁邊睡。將變赫々神明國。爲腥羶之荒域矣。然るに幕府苟安を貪り外夷の術中に陷るを知らない。外夷の術中とは何ぞ、曰く開港借地之てある。彼等は之により國の膏澤を吸ひ盡し、遂に神州を奪はうとするものてある。抑も開國の約を爲すは王命に反するもの。犯王命者必誅。古之制てある。方今天下危殆に陷る所以のものは、國內上下の心乖離せるによる、若し國論を統一し擧國一致の實を擧げるには、皇室を中心とするより善きはない、之が爲めには先づ幕府を倒す可きてある。

然らば討幕の時期如何。

それは今てある。今は一刻も猶豫す可き時てはない、天下の形勢を見るに、今は陽に平和に似たれども、內既に禍亂を藏して居る。今や國民一般に覺醒の時てある。一度亂發せんか、各藩分爭、外夷隙に乘ぜん。卽ち今は禍亂を未發に制す可き時てある。一日も早く國內を統一するを要するのてある。新潟及大阪、兵庫、堺の諸港の開港就中近畿三津の開港は鳳闕の危殆を釀す可し、故に一日も早く幕府を倒し、對外政策を實行するを要する。

さらば討幕實行の方法は如何に。

一二の藩主(彼は筑薩同盟を企てた)密かに義を結び、竊に詔勅を得て奮然兵を擧げて大阪を奪ひ、天子を奉じ以て徧く天下に訴ふる所あらば、天下の大部分之に就くてあらう。其の就く者をして就かざるを者を討つ易々たるのみ。斯して天下

之に歸する時、青蓮院宮を征夷大將軍として函嶺を越え東征す可し。斷じて行ふ鬼神も之を避く、只斷あるのみ、尊王攘夷、只英斷あるのみ。

斯くて普天の下卒土の濱、悉く王土に歸し海內一家とならば此時は卽『胡塵』を拂ふ時である、此の對外政策如何が英斷錄の後篇を成すものである。

夫れ突如として兵起り行動甚だ神速ならば、四方に滯在せる外人は愕然として一時其の本國に歸還するであらう、これ乘ず可きの時である。此の機を逸せず邊彊を固め、海軍を盛にし又外交策により夷を以て夷を制し、國力內に充つるや、四方を開拓す可きである。先づ朝鮮を征して三韓の舊に復し更に鷹鷂の鳥雀を逐ふ如く巨艦を跨駛して百蠻を蹂躪し、宇宙を卷布し天の覆ふ所地の載する所、普く皇威に浴せしむ可しと(彼が國民的自信力の强きを見よ)。

其の他內政に關し種々の建策を列擧して居る。

三　その人物

以上は尊攘英斷錄の內容である、私は彼を今日の智識を以て批評し去らうとはしない。又假令之を當時の狀況に於てしても、彼を同時代西方の先覺橫井小楠、吉田松蔭、永井雅樂等に比較して其の判斷の的確、其の議論の精到を云ふものでない。開國否か攘夷是か。討幕行ふ可きか公武合體排す可きか。識者の間議論紛々として止まなかつたのである。然し乍ら政治は又一つの勢である。勢に乘じつゝ國民を高遠なる國家の理想に近けやうとするのが政治である。而して彼自身の任務は實に此の勢を助成した事にあつた。此の點に於て彼は甚だ多くを成したものである。私は區々たる彼の議論に拘りて彼の功績、彼の動いた精神、彼を動かした理想を忘るゝ事を欲しない者である。

彼は實に國民主義運動の先驅者であつた、又軍國主義の主唱者であつた、それ故に彼は又帝國主義者であつたのである、彼の眼中には只神州(日本國)なるものがあつたのみである。彼と同時代の者は殆ど皆只藩あるを知つて神聖なる國日本あるを

知らなかつた時、時人の眼未だ見ざる統一せられたる大八洲國を心眼に見たのてあつた。彼は又此の神州の世界的發展を想つた。彼の神州の地理的範圍は多分今の極東てあつたてあらう。

然れども彼は又境遇の子てあつた、彼の精神は時代の衣を着けた。攘夷卽ちそれてある。彼は外人の暴戾に非常なる憤慨を爲し、攘夷の熱を昂めたが、彼の攘夷は外國人と交際をしないと云ふ事てない。西洋諸國に對して日本の實力的獨立を確立す可しと云ふ事てあつた。當時の日本に最も缺けて居た事は、國の統一と實力とてあつた。故に眠れる國民の前に之を絶叫したのてあつた。既に內に國力充實せば之を外に發展せしめやうとした。故に軍國主義帝國主義ならざるを得なかつたのてある。此等の思想は彼死して半世紀の今日、我國に於て盛に唱道せらるゝ所のものてある。然り彼の論議は今日に至りて着々實現せられつゝあるを知る。然れども誰か知らむ、彼をして若し今日生れしめば、再び近人の思想と異なるものを主張して、斯して假令今日と雖も尙且世の誤解、疑察、不遇、迫害を免れ得ざる可きを。

彼は實に誠の人てあつた、私の彼につき特に感ずる事は彼の議論てはない、又彼の活動てもない、實に彼の至誠てある。彼こそは『これ眞のイスラエル人にして、心僞なき者』を思ひ起さしめるものてある。既に彼は誠實てあつたから、單純てあつた。彼に野心なるものは毛頭もなかつた。一身の利達の如き少しも念としなかつた。彼は名を後世に遺さうなど言ふ考すら持たなかつた。彼の心の澄徹せる事は、かの高山の間に横はる湖水の如くてあつた。若し時勢が彼を呼び起さしめなかつたならば、彼はいつまても風月を友とし、古典と詩歌との研究に彼の一生を終つたてあらう。

君の世の安けかりせばかねてより
身は花守とならましものを。

之れ恐らくは彼の眞の述懷てあらうと思ふ。然れども時勢は彼をしていつまても

平和なる生涯を送る事を許さなかつた。彼の青年時代は實に日本開闢以來の大變動の醞釀せられつゝあつた時であつた。彼は何物にか感じたのである。彼が心不純を交へざりしだけ、それだけ人より早く時勢の徵候を觀取し得たのである。かくて彼が胸裡に一個の理想閃くや、單純なる彼は餘事を顧みるに暇あらず、之を追ひ之に追はれつ、一身は元より其の家、其の妻子、其の父母をすら忘れて、只之が實現に奮鬪したのであつた。彼は此の事を以て彼の天職なりと信じた。それ故あらゆる困窮にも忍び得たのである。

かゝる世にかゝる魂もたる身の、
あれしも神の心なるらむ。

之れ彼の深く自己を顧みた時の歌である。然らば彼が一身を捧げて恨まなかつた彼の理想は何であつたか。それは「天下之公道」による國家の建設であつた。而して彼の「天下之公道」なるものは、宛も北辰が萬世不易の坐を占め群星之を環ぐるが如く、天子を中心とする君民間一定の秩序ある國家關係であつた。彼が王政を古に復せしめやうとしたのは、此の關係に正さうとしたのであつた。彼をして云はしむれば之が「天下之公道」である。藩主と藩士との關係の如き「後世之私事」であつた。

私は茲に彼の見解の如く、君主國のみが天下之公道であるや否やを論じやうとするものでない。只彼が國家は公道によらなければならないと云ふ事を確く信じ、之が爲め一身を捧げた其の精神を明にすれば足るのである。然し彼は多くの誤解を招いた、又多くの非難を招いた。親戚からは何故に家を齊えないかと詰られ、藩からは何故に藩に累を及ぼすかと責められた。彼孝ならざるにあらず、忠ならざるにあらず、然れども彼の行動は不孝不忠の如く見えた。純なる彼れは竊かに此の事て心を痛めたであらう。僅に慰め得たのは

めしうどと身はなりながら天地に、
愧ぢぬ心ぞたのみなりける。

時人の非難迫害に對しては却つて彼を深刻ならしめた。

近頃始知仙老見。　忤ニ君親一而大節成。

然し乍ら之を要するに、彼は決して深い人と云ふ事は出來なかつた。又博い人てもない、特に高い人と云ふ事も出來ない。若し維新の志士先覺者の内に在りて、彼の特色如何と問はゞ、彼の純潔てあると答へ度い。彼は實に清い人てあつた。從つて單純なる人てあつた。維新の志士中彼の名多く顯れず、彼の事業は表面的に失敗なりしも、彼の有つた此の清い心は千代の松原の緑と共に、常盤に筑紫の美を濟すものてあらう。私は彼に於て日本人らしい日本人を見る。（井華大正六・一〇）

端午の節句

我國古來の風習として家に男の子が生れたときには、毎年五月五日之を祝して鯉幟を立て、又家に金太郎の人形を飾つてそれに肖かるのを常とした。我等の祖先が此の風習を創め、之を相傳へ來たには深い意義があつた。

金太郎とは誰ぞ。彼は足柄山の山奥て赤裸て育つた野人てあつて、力飽くまて強い日本男子てあつた。彼は單獨てあつた。無一物てあつた。そして強かつた。シラーは云ふ「人は單獨のときの方が強い」と。然り而して人は無一物となつて最も強いのてある。何の黨派なく、何の依り頼むべき人なく。財產なく、肩書なく、名聲なく、只獨りとなつて彼は最も強いのてある。何となればこの時始めて神に頼つて眞の自由を知り、天地を我が持物とし得るからてある。

鯉は急流を遡る魚てある。エマソンは言ふ「死んだ魚は流に從つて下るが、生き

た魚は流を遡る」と。世の流行に追従し、世が右と云へば右し、左と云へば左するのは死んだ魚である。世の人皆然りと云ふとも正義ここになければ獨り否と云ふは生きた魚である。その信ずる處千萬人と雖も我れ往く。然かも鯉は一度捕へられて俎上に載せられたなれば、包丁其の身に加はるも微動だにしない。晏如として其の身を天命に委ねるのである。之れ日本男子の本懐であつた。今や此の意味に於て端午の節句を祝するものは誰もない。(三・五)

南洲だるま

明治維新の戰役に南洲翁の義氣に感じ、其の時以來翁に師事した東北の一老人が鹿兒島市に擧行せられた南洲翁五十年祭にはる〳〵老軀を提げて參列し、歸來語つて曰く、鹿兒島に在るものは南洲神社と南洲せんべい、南洲だるまの類のみ、南洲翁の精神は既に莫しと。

偉人の世に遇せられる道が二つある。第一は時人に容れないことてある。第二は後世に偶像視せられることてある。卽ち、蹴倒されて後仰み倒されるのてある。之は所謂天才たるの罰てある。此の罰を受けたものてナザレのイエスの如きはない。蹴倒されることは猶忍び得可し、仰み倒されるに至つては忍び得るものてない。

ユダに銀三十にて賣られ給うた彼はルーテルの出た頃には、再び免罪符として賣られ給うた。彼は今や敎會の内に安置せられて物言はぬだるまとして仰まれ給ひつ

つある。然れども彼はこゝに居給はない。我等は東方の博士の如く今一度星に導かれて、彼を馬槽の内に拜しなければならない。星とは聖靈である。馬槽とは聖書のことである。（二・一二）

イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ、東の博士たちエルサレムに來りて言ふ、「ユダヤ人の王として生れ給へる者は何處に在すか。我ら東にてその星を見たれば、拜せんために來れり」（マタイ傳二・一）。

「視よ、この民一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんぢらに告ぐ、今日ダビデの町にて汝らの爲に救主うまれ給へり、これ主キリストなり。なんぢら布にて包まれ、馬槽に臥しをる嬰兒を見ん」（ルカ傳二・一〇）。

ロイド・ガリソンを思ふ

「バンカーヒルの立てる處、自由の生誕地に於て、余は全危險を冒して國民の眼前に奴隷解放の旗幟を掲げることに決心した。今や此の旗は捲き去られることあらざるべく、時の經過も死物狂の敵の彈丸も之を損ふことなく、永く翻るであらう。然り、總ての鎖が切斷せられ、總ての奴隷が自由になるまでは。

南部の壓制者は戰慄せよ、彼等の黑幕は戰慄せよ。北部の辯護者は戰慄せよ。私は眞理が嚴格なる如く嚴格にして、正義が妥協しないやうに妥協しないであらう。此の問題に關しては控へ目に考へ、語り、又書くことをしない。私は一生懸命である。私は曖昧にしないだらう。私は辯解しないだらう。一歩も讓らないであらう。そして遂に聽かれるであらう。後世は私の正しかつたことを證しするであらう」

これは、千八百三十一年一月、彼が二十六歳の時ボストン市の商業集會所の騷々

しい一隅、小さな窓とインクて汚れた壁の下に、印刷機と活字臺と編輯机と而して主筆兼發行人たる彼の寢臺との外何物もない一室に於て刊行した雜誌解放（リベレーター）の第一號所載の宣言書てあつた。彼とはウキリアム・ロイド・ガリソンのことてある。實に北米合衆國奴隷解放運動の端緒は此の一室に發したのてあつた。詩人ローエルは彼の一生をいみじくも一篇の詩に歌つた。左に數節の拙譯を掲げる。

狹隘の室友なく名なく、
　活字を植える貧しき青年。
場所暗くして家具なく汚（きたな）し、
　されど黑人の自由茲に生ぜり。

＊

援助の來るや遲々たり、
　獨力鈍重の世界を動かさんとす。
援助何ぞ、自分自身植字し得る、
　彼に不屈の勇氣と印刷機あり。

＊

眞理よ、自由よ、汝は今も尙、
　馬槽（まをけ）の內にはぐくまる。
新日の輝く曙の戸を、
　開くは宮裡の人にあらず。

＊

大川も源近く涉る時は、
　誰れか測らん末遠く。
數多の流加はりて、

澎湃として海に入るを。

＊

小なる創始よ、汝は强くして大なり、
若し誠實と智慧の上に立ちなば。
汝は不義に打ち勝ち、清き未來を築き、
王冠をかち得て之を戴く。

彼こそは實に人類自由の鬪士であつた。彼は早く父を失ひ、家貧しく、幼より印刷所に雇はれて植字工となつて成長した。彼は始から學者ではなかつた。新奇な學說を追ひ求めて後れざらんとし、又坐して社會の道德的基礎に關する學問的體系を樹てることは彼の業ではなかつた。彼はビルグリムファーザースの上陸したマサチユセッツ洲に生れ、髓の髓まで清敎徒であつた。彼は黑人が白人の爲めに鎖につながれ、牛馬の如く使役せられ、物品の如く賣買せられるのを目擊して、彼の脈管に流るゝ清敎徒の血潮はその爲めに湧き立ち、彼のペンは動き、彼の習得した印刷術は彼を助け、こゝに解放誌の發刊となつたのである。

彼は我國現代の公娼廢止論者の如く漸進主義者にあらずして奴隷の卽時解放を主張した。彼の烱眼はいつの世でも漸進主義は敵に利用せられ、目的の達成を無期限にせられる惧のあることを看破したからである。此の一事と彼の殊更なる亂暴な言辭とは彼の雜誌をして初號より世人の注意を喚起せしめ、此の運動の最大原動力とならしめた。されば奴隷使役者は此の强敵の出現により極度に激昂した。ヂョルヂヤ州の如きは五千弗の懸賞を以て彼を捕縛せんとした。

解放誌が號を進めるに從ひ彼に對する迫害は益々盛となつた。千八百三十三年、彼の編輯室は多數の暴徒に襲はれ、彼は衣服を剝がれ、首に綱をつけられ市中を曳き廻はされた。市の官憲は辛じて暴徒の手から彼を奪ひ、一時獄に入れて彼をして

九死に一生を得せしめた。今日ボストン市を訪ふ人はコンモンウエルス街上、彼の立派なる銅像が建てられて、其の下に解放誌第一號宣言書「……遂には聽かれるであらう。後世は私の正しかつたことを證するであらう」との言が銘りつけてあるのを見るであらう。そしていつの世にも父祖の迫害した預言者の墓を其の子孫が建て此を崇めるのを知るであらう。

彼の主張は遂に貫徹した。千八百六十年、アブラハム・リンコンの奴隷解放の大宣言は發せられた。リンコンが暗殺せられる數日前、或人がリンコンに此の偉業の完成を賞讃したとき、之に答へて大統領は云つた。「私は只一個の道具に過ぎなかつた。ガリソンと我國の奴隷制度廢止論者の論理と道德力、それに加ふるに軍隊とがした仕事である」と。學者と牧師とから、「最も墮落せる部類の背信者」「惡黨」と罵られたガリソンこそは北米合衆國黑人種自由の恩人であつた。

彼は其の一代に於て彼の事業の成るのを見た。然れども彼の眞の目的はこれで達成したのではなかつた。彼は奴隷制度の廢止よりも更に大なる目的を有つて居た。奴隷制度は此の大なる目的達成の途上に横はる一つの邪魔物に過ぎなかつたのである。然らば彼の生涯の大目的とは何であつたか。それは鬪爭の全廢、道德の力以外、人を强制することのない自由の社會、眞の平和の建設之であつた。

彼は無告の民が暴虐に苦しむのを見て義憤に燃え激烈な言辭を以て敵を攻擊したが、彼自身は全く無抵抗で敵の迫害を受けた。神以外に何者をも怖れず、良心の指すところ百萬の敵中に勵進する勇氣あり、然かもキリストの御言「惡しき者に抵抗(てむか)うな。人もし汝の右の頰(ほゝ)をうたば左をも向けよ」を生涯の主義とし、平和の世界の實現を生涯の目的としたのである。詩人ホキチャーの歌つたやうに、「彼の口からシナイ山のラッパが鳴り響いたが、其の響きの伴奏にやさしい歌の調あり、彼の激怒は憐憫から生じ、惡に對する憎惡は人を愛する愛から出た」のであつた。（經濟往來二、一二）

高山と人物

私は今年の夏を輕井澤に過した。その寓居の眞正面に海拔八千尺の淺間山が聳えて居て、私は朝夕その雄姿を仰ぎつゝ暮した。早朝鳥の聲に眼を覺すと、四隣の山はまだ眠つて居る時に、此の山の頂きのみは既に旭光に照され紫色に薫つて居た。夕日が此の山の彼方に落ち、燦然たる數條の光線が此の山の背後から發して光輝附近の森を覆ふ時、蒼然として屹立して居る此の山の姿は一入莊嚴であつた。

山は常に白い煙を吐いて居る。山頂近く數十丈に及ぶ斷崖絶壁があつて人をして容易に近づかしめない。然かも中腹以下は樹林に覆はれ、清冽なる泉が湧き出て、鶯の聲各所に聞え、百合の花、撫子、女郎花などの野花が咲きほこつて居る。更に麓に至れば田畑開け、人家群り立ち、百姓其の生を樂しんで居る。然るに若し追分驛附近に立つて脚下を見れば、自分の立つて居る處はまだ山の中腹であつて、山麓は更に下に延び、深き谿谷が之を穿つて居るのを見て、一體此の山の根はどこまで延びて居るのであらうかいぶかるであらう。

私はそう思つた、大人物とはこんなものであらうと。彼の中腹には清き思想の泉が湧き出て、美しい行爲の花が咲き、何人にも親しみ得られるが、彼はそれより遙に深い地盤に立ち、又彼の胸には斷崖絶壁があつて人をして容易に越えること能はざらしめ、其の内に熱火を藏して煙を吐き、これに陷るのは怖ろしいことである。然かも其の頂上には日光が永遠に輝いて居る。

世の人は完全を喜び圓滿を貴ぶ。されど彼等の愛する人物は美しい草花のやうなものであつて、折取つて之を客間に眺めるのによきものである。其の圓滿は常にやさしく親切で如何なる無理も叶へてくれるやうな円滿である。彼等は偉大を愛しないではないが、其れが偉大なればなるだけ、自分の意を迎へてくれるものでなければならない。卽ち親分肌の者たるを要する。彼等は自分の欲求を滿してくれる間は

此の人物を尊敬する。自分の理想に叶ふ間は之に師事する。然れども一度己の意に反し又己の爲すところを惡しと云はるれば忽ち之を弊履の如くに捨て、身を飜して之を蹴る。彼等の以て完全とし圓滿とする處のものは小なる自己の欲求を滿し得るか否かにより定まる。その人物評價の尺度は自己に在る。その利己的慾求に在る。

若し眞人物を知らうとせば、又若し此の大なる宇宙と人生とを知らうとせば、之を自己の立場より觀てはならない。又之を既に出來上つたものとして見ず、完成の道程として見なければならない。故に宇宙萬物の造主なる神の立場から觀なければならない。「神その造りたる諸の物を視たまひけるに甚だ善りき」（創世記一・三一）である。一度神本位に宇宙と人生とを觀て始めて其の眞と善と美とを知り得るのである。大人物とは神の視て義しとし給ふ人物であつて、決して自己本位の小人物の目に映ずる理想的人物ではない。孔子曰く鄕愿は德の賊なりと。「凡ての人なんぢをほめなば禍なるかな」である。（二、一一）

基督者とは何者か

基督者とは如何なる者を云ふか。或人は、酒と煙草とを飲まず、日曜毎に敎會にゆく者であると言ふ。されど基督者ならずとも酒煙草を飲まないものは多く、基督者と雖も日曜日に敎會にゆかない者がある。かゝる表面の行爲を以て基督者の如何なるものなるかを說明することは出來ない。明治の初めヤソは西洋の文明の淺薄なる模倣者、我が國粹の破壞者、國體の背反者であるとして憎惡、攻擊せられた。現今でも尙ほその餘燼を認め得る。殊に田舍に於てさうである。然るに今や所謂思想國難に際して爲政者が此の基督敎をも利用して思想を善導しやうとするに至つたのを見れば、あながち基督者は西洋思想の淺薄なる模倣者にあらず、又我が國體と相容れないものでもない事が知られる。我國に於て基督者と云へば何かしら特種の人間の如くに思はれ、何處かしら常人と異つてゐるやうに見られてゐる。彼等は概し

て正直である。又溫良である。然れども正直又は溫良も亦基督者の特質と云ふ事は出來ない。何となれば此等の性質は基督者の專有物と云ひ得ないからである。然らば一體基督者とは如何なる人種であるか。

基督者にも僞物がある。其の眞僞は容易に之を判別出來ない。多分最後の審判の時に至つて初めて明かとなるのであらう。然し私は眞の基督者を定義して次の如く言ひ得ると思ふ。

基督者とは神に赦された罪人であつて、キリストに在つて生くる者である。

一、基督者は罪人である。こゝに云ふ罪人とは必ずしもかの刑事犯罪人に限らない。國家の制定した刑法の規定に違反せることを云ふのではない。基督者が罪人であると云ふ意味はそれよりももつと廣く、聖人でないと云ふことである。されば基督者は此の點では常人と何の異なる處はない。我等は何人と雖も悉く道德上罪なしと云ふことは出來ないものである。我等の良心は己れの正しくない事を證する。試みにイエスの山上の垂訓を讀みて見よ。

古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり、されど我は汝等に告ぐ。すべて兄弟を怒る者は審判にあふべし。

「姦淫するなかれ」と云へることあるを汝らきけり。されど我は汝等に告ぐ。すべて色情を懷きて女を見るものは既に心の內に姦淫したるなり。

「目には目、齒には齒を」と云へることあるを汝等聞けり。されど我は汝らに告ぐ。惡しき者に抵抗ふな。人もし汝らの右の頰を打たば左の頰も向けよ。

「なんぢの隣を愛しなんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ。汝らの仇を愛し、汝等を責むる者の爲めに祈れ。

誰か此の嚴格なる道德律に照して、我れは總て之を行つたと云ひ得るか。然もこれは人の道であり、神の誡命である。然るに我等は之に違反して我等の肉の慾に委

かせて、身を毀ち、又己れのことのみを思うて人の善を思はず、反つて人を羨み、憎み、そしり又、害しつゝある。人は皆罪人である。基督者も亦罪人たる事に於て何等異なる處はない。若し異なる處ありとせば、それは普通の人は己れの罪人なることを憚り、隱し、人前を繕ふに反し、眞の基督者には之を告白し得る正直がある。彼は事更に自己の行爲を飾らうとしない。

二、基督者は神に赦された罪人である。基督者は罪人なること常人と異ならざるも、その罪は神によつて全く赦されたことを確信して居る點に於て之れと全く異つて居る。彼が己れの眞の罪人なるを知悉して居り乍ら、然も之を飾らうとせず、正直に罪人であることを告白し、又有りの儘に振舞ふのは之れがためである。こゝに罪が赦されたと云ふのは決して罪が無くなつたと云ふ事ではない。罪は現にある。彼は現實に罪人である。然れども、其の罪があるのにも係はらず、神は罪なきものゝ如く之を受容れ給ふと云ふのである。基督者は神に赦されたる罪人と云ふは此の意味である。

然れども若し一家の主にして其の家人の放埒を無視して其の儘之を赦すならば、之れ一家の紊亂である。宇宙の統制者たる神が他に何等の理由もなく、我らの罪を赦し給ふ筈がない。我等の良心も亦明にその罪の赦を納得することが出來ない。我らは明に罪が赦されたことの證據を把握するまでは何かしら不安に襲はれる。我等が現に罪人でありながら其の罪を赦され、良心も亦之に滿足し、自責の苦痛を脱して天空海濶を感ずるには、何か特別に大なる證據がなくてはならない。若し然らずして己が罪の赦されたことを告白するならば、それは己れを欺くものであつて、いつかその自己欺滿は暴露する。そして大なる失望に陷り、又往々にして極端なる懷疑に陷り、神を疑ひ、萬物の虛無なるを思ふに至る。然るに基督者が年と共に益々其の罪の赦しの確實であることを知るのは何故であるか。それは只我らが心の内に

卽ち主觀的に罪の赦しを感ずるのみてなくして、我が罪の赦された確實なる客觀的事實を有するからてある。

それは何か、イエス・キリストの十字架がそれてある。神は我ら罪人に對する深甚の愛を顯はし給ひ、其の獨子を我等の中に遣し、これを我等の罪とし、呪詛とし、我等に代つて十字架に死せしめ、以て我等は死し我らの罪はそこに罰せられたものと看做し給ひ、このキリストを信ずることにより我等の罪を赦し、義人ならず、聖ならざる我ら罪人が宛かも義人として聖きものゝ如くに、聖き神と義しき關係に立たしめ給ふからてある。

かく我らの罪は既に糾彈せられ、處罰せられた以上、最早我が罪の再び罰せらるべき筈はないのてある。疑ふものは之を疑ふがよい。我等十字架の此の贖罪を信ずる者には、之を信じたその瞬間から良心に平和の來ることを實驗するのてある。古來此の事實の理論的解明を試みた幾多の神學說が陳腐となつた。されど此の事實のみは、今も尙信者の心の中に新鮮てある。

此の十字架を仰ぐ時、我らは罪人てありながら良心の自由を感ずる。最早何人も道德上自分を責める理由の全くないことを知る。我らは神に義とせられて罪とその苛責とから完全に解放されたのてある。こゝに「基督者の自由」がある。此の自由は言論、集會、結社等の自由と異なる。自由主義者の自由と全く異なる。それは良心の自由てある。罪から脫しやうとして脫すること能はず、惡るかつた、すまなかつた、もつと善くすべきてあつた、もつと自分は義しくあるべきてあると良心に責められて心に苦しむことが全く無くなつたのてある。神に愛せられ、神に義とせられて神に對し平和を得、己が總ての事を唯一の善にゐます神に全く委ねまつり、又總ての願を神に祈り得る。世にこれ以上の自由があるか。然り、これ以上の平和があるか。然も基督者は如實に之れを有つのてある。

三、基督者はキリストに在つて生くる者である。かく我らがその罪を赦され、道徳的束縛から解放せられて自由となり、言ひ知れぬ平和と歡喜とを感ずるやうになつたのは、神が我らの罪の犠牲として備へ給うた神の子イエス・キリストを信ずることによることは前に述べた通りである。聖書は言ふ。

彼は神の貌にて居給ひしが神と等しくあることを固く保たんとは思はず、反つて己れを空しうして僕の貌を取りて人の如くなれり。既に人の狀にて現れ。己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給へり。（ピリピ書二・六―八）

人の子を神の子となさん爲に、神の子が人の子となりて現はれ給うたのである。彼は罪を外にしては完全に我らと同じ人であつた。凡の人であつた。然し道徳的に完全なる人であつた。彼は人々に忌み嫌はれた娼妓、取税人の友となり、神の喜び給ふものはパリサイ人の如く己れを神の前に誠實純眞、義人として示すことでなくして、反つて碎けたる魂である事を敎へ給ふた。そして一點の罪と穢のない身を以て我等の運命を分擔し、我らのなやみ、我らの苦しみの一つだに、彼のなやみ、彼の苦しみならざるはなきまでに、我らを愛し、我らと一つになり給ふたのである。

否々、啻にそれのみではない。彼は我らの禍の根源である、神と我らとを隔てる我らの罪そのものとなり、（コリント後書五・二一）その罪の結果なる呪を自ら我らに代りて受け（ガラテヤ書三・一三）十字架上、神の與へ給うた苦痛の杯をその殘滓までも飲み乾し給ふたのである。彼は「死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給ふた」。誰に？　神の御意にである。我ら同胞を其の極みまで愛し給ふたキリストが我らに代つて此の苦難を受け給ふことは神の御意であることを知りて之に絶對に服從して死に給ふたのである。

何故十字架の死が神の御意であつたであらうか。我等の淺い智慧を以てしては到底此の神秘を知り盡すことは出來ない。されどこれだけは明白である。若し神が只

愛のみに居まして、罪人の罪を無視し給ふものならば、此の十字架の死は無用てあつた。されど神は正義を如何せん。然かも神若し正義を維持する爲め罪人を直接罰し給ふならば、これ又キリストが十字架に死に給ふことは無用てあつた。されど神は罪人が滅びるのを欲し給はない深甚の愛を如何せん。此の十字架の死こそは神が神てあり給ひ、然も罪ある我らが罪あるまゝ神と義しき關係に復歸せしめらるゝ爲めに無くてならぬものてあつたのてある。

此のキリストの十字架の死によつて、宇宙は嚴肅なる正義の支配する處てあると共に宏大なる愛の充滿する處てある事が明に顯はれたのてある。此の世に於て惡人が時を得て榮える事のあるのは、神在ますとも其の正義が嚴重てない爲めてはなく、之を罰するためには其の御獨子をも惜しみ給はない程嚴格てあり給ふ神が、キリストのために今までも人類の罪を見遁し、今その十字架上の苦難によつて明に其の罪を赦し給うた爲めてある。正義の嚴ならざる故てなく、罪を罰せずして之を寛容し又之を只て赦すには餘りに嚴なりし爲めてある。而かも此の十字架の死によつて「神の義」なるものは、神自ら正義に在ますのみてなく、罪に呪はれた全人類、その爲めに穢れた全宇宙を包容して之れを義として、之を聖め給ふ義てある事が示されたのてある。

キリストは實に神の此の深い御意に絶對に服從して此の苦しき杯を飲み乾し給ふたのてある。彼は神の獨子てあつて神が人類の爲めに備へ給うた罪の犧牲てあり給ふたと共に、彼は又人の子てあつて人が彼に在つて義を完全に行ひ、榮光を神に歸し奉つた、神への至上の献げ物てあつたのてある。我らは彼を信受する時、始めて神の如何なる方なるかを知り、而して又彼に在つて生き、彼の愛によつて彼と連なる時、初めて靈と眞とをもて神を拜し奉るに至る。我らの自由、我らの平和、我らの歡喜、然り、我らの新生命は彼に連なることから生ずるのてある。彼の愛を受け彼と合致して、我らも亦眞實に正義の士となり、又愛の人となり得る。我らがかく

も辱しめ、捨て、十字架につけたキリストが、かくも我等を愛して、己れの生命を與へ給うたやうに、我らも亦、彼に在らば、我らの敵を赦し、同胞を愛し、自らその罪に代らうとするまでになるのである。（ロマ書九〇三）

彼の生命はかくして次第に我が生命となる。然かもこれは我自らの力によるのではない。キリストの死と生とを、殊に十字架の贖罪力を信受することにより、聖靈が我が内に入り來るからである。されば只信仰である。精勵格勤、遂に聖賢となるのではない。行爲によらず、信仰により、然り、キリストを信ずる信仰のみにより己れの罪人たるを自責せず、只彼を我が義として受け、彼を我が潔めとして保ち、此の後彼を我が榮としてその顯現を待つのである。こゝに人生幾多の悲風慘雨の内に在つて尙も歡喜と希望の生活を爲し得るの祕訣がある。之れを有てるものを基督者と云ふ。（三、一二）

二種の信者

人の子その榮光をもて、もろもろの御使を率ゐきたる時、その榮光の座位に坐せん。斯て、その前にもろもろの國人あつめられん。之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、羊をその右に、山羊をその左におかん。（マタイ傳二五・三一）

世にクリスチャンと稱する者は多くある。然し乍ら羊に綿羊と山羊とある如く、信者にも亦二種あつて、かなり明白に之を區別し得る。それは敎會信者と無敎會信者の區別ではない。キリスト信者と基督敎信者の區別である。そしてキリスト信者の數の甚尠ないのに反し、基督敎信者は甚多くある。敎會信者の大部分はそれであり、無敎會信者の大部分も亦それである。

キリスト信者とは何か。嘗てピラトの時十字架に釘けられ、死して葬られ、三日目に甦り給へるイエスを我がキリスト（救主）とし、我が願望祈求を悉く聽き給ひ、

我が一切となり給ひ、我を完全な者となし給ふ御方として信頼する者である。然らば基督教信者とは何か。佛教儒教等に相對して基督教と云ふ一宗教を眞理とし、己が人生觀として信じ、之に據つて立ち、之を實踐する者である。

共に信ずる者である。然れども其の信は、前者に在りては對者に信頼服從することを意味し、後者に在りては自己の研究確信實行を意味する。兩者等しく眞理を信ずると云ふ。然れども、前者に在つては眞理は眞理者（ヨハネ第一書五・二〇）であり、後者に在つては純眞理である。それ故、キリスト信者の信の對象は人格であり、基督教信者のは教義である。若し基督教の教義を信ずる者を宗教家と云ひ得べくば、キリストを信ずる者は宗教家ではない。單なる基督者である。（四、九）

福音の眞髓

信者のうち福音的信者と然らざるものとの二つがある。パウロに對する法律的ユダヤ的基督者はそれである。アウグスチーヌス對ペラギウス、カルビン對ソシヌスも亦それである。福音的信者とは「福音」を其の儘に信受する者である。其れに由つて眞に自己の更生を感じた者である。然らば福音とは何であるか。それは甚だ簡單である。コリント前書十五章一節以下がそれである。

兄弟よ、曩にわが傳へし福音を更に復なんぢらに示す。汝らは之を受け、之に頼りて立ちたり。なんぢら徒らに信ぜずして我が傳へしままを堅く守らば、この福音に由りて救はれん。わが第一に汝らに傳へしは、我が受けし所にして、キリスト聖書に應じて我らの罪のために死に、また葬られ、聖書に應じて三日目に甦へり。

之である、イエス・キリストが我らの罪、然り、我が罪のために死に、死して葬ら

れ、三日目に甦へり給ふたと云ふ事實、これが福音である。我が神に對する一切の罪の責を果すため、我に代り、我が死を死し給ふた。大死一番、これにより我は生き乍ら罪に死んだのである。「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず」（ガラテヤ書二・二〇）である。つきたりてなく、死したりてない。つけれたのである。死んだ者とされたのである。そしてこの死から彼は甦へり給うて、キリストと偕に死んだ者とされた自分も亦神に向つて甦へつたのである。「我らキリストに接がれて、その死の狀にひとしくば、その復活にも等しかるべし」（ロマ書六・五―八）である。

神は我が靈魂の奥底に、キリストにより此の絶大の奇蹟を行ひ給ふたのである。福音とはこれ以外にない。これは己れの能力、純眞、生活態度と全く無關係に神がキリストにより罪人の我に行ひ給ふた絶大の恩惠である。卒直に之を信じて心に大革命が生ずる。（五、一〇）

我らの畢生の事業

現代人の標語は「社會的事業」である。如何なることも社會と云ふ尺度にあてゝ見て其の價値を測定するのである。されば廣く民衆に訴へ、それに理解せしめ、その賞讃を得る事業をした者程、現代に生甲斐あり、偉大な人物として仰がれるのである。現代に於ける救世主は實に此の社會的事業家である。故に基督教會迄が社會奉仕を以て其の主たる目的とするやうになつてしまつた。

我らクリスチャンにも一つの事業がある。然し乍らそれは如何に言ひ顯はすも「社會的」ではない。社會事業、社會奉仕、社會運動、其他一切社會と名附けるものは我らの事業ではない。「われら神の業を行はんには何をなすべきか」との問に答へ給うたイエスの御言がそれである。曰く「神の業はその遣はし給へる者を信ずる是なり」（ヨハネ傳六・二九）十字架に釘けられ給うたイエスを信ずること之れが我らの事

業てある。

されば我らは社會的に廣汎なる事業をなし、民衆に喝采せられやうとしない。一切を擧げてキリストに信賴し、その導き給うまゝ十字架に釘けられ給うた彼に倣はうとする。特にその死に倣うて死せんとする。クリスチャンの最大事業とは實にキリストを信じ、而してキリスト信者らしく死ぬることてある。これより大なる事業はないのてある。

一生を國と人とのために盡くして然かも顧みられず、援けられず、反つて嘲けられ、憎まれ、十字架に釘けられ、然かも不平を言はず、人を罵らず、その罪を心から赦し、限りなく愛し、自らその罪を負ふてその人を正す。これ神の恩惠により、神御自身信ずる者のうちに成し給ふ最も光榮ある事業てある。（五、三）

キリストか此の世か

世もし汝らを憎まば、汝等より先に我を憎みたることを知れ。汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我なんぢらを世より選びたり。この世は汝らを憎む（ヨハネ傳一五・一八、一九）

此の世は我等の救主イエスを十字架に釘けて殺したものてある。故に世はキリストの敵てある。我等若しキリストに忠信ならんか、此の世を敵とせざるを得ない。此の世に於て成功し、名譽を得、幸福てあることと、キリストの忠實なる僕となることとは全く兩立しない。これかあれか何れかてある。多くの基督者がその信仰熱くもあらず、冷かにもあらず、煮えきらないのは、この二股主義による。此の世につける凡てを捨て、餓死する覺悟てキリストに從へ、さらば優れた能力が自分自身から出てず、神から來るのを感ずるてあらう。心は言ひ知れぬ平安、歡喜、希望に

滿たされるであらう。

キリストのうちに生きて最早我に死はない、罪もない。神と我とを距てる何ものもない。熱愛するものは正義である。世よ我を憎め、我はキリストと共に正義を行はん。彼は既に世に勝ち給ふた。その彼が我が義、我が聖、我が榮光である。凡てを捨てゝ彼に從ふ者に彼は正義にして愛、聖にして榮なる己れ自身の生命を與へ給ふ。彼は又我が王にして、我は彼の民であることを知る。

されど彼に信頼せず、彼の助を求めず、世に降り、世に安きを求むる者は燈火がその光を失ひ、鹽がその味を失うたと同然である。「後は用なし、外に捨られ人に踏まるゝのみ」（マタイ傳五・一三）（四、八）

失業者への慰め

あなたは失業して最早收入の途がなくなつたとて、これからどうして食つてゆかうかと心配するには及ばないてはありませんか。あなたはあなたのために己が生命を捨てゝあなたの罪を悉く贖ひ、神をアバ父よと呼び奉るやうにして下さつたキリストを信じないのですか。又我等の主イエス・キリストの御父なる、そして又あなたの父なる神を信じないのですか。

天地萬物を悉く創造し、之を御手に支え之を支配し給ふ全知にして全能なる神、その神に背いた罪人の滅ぶることを憐み、己が御子をも惜しまずして我等に賜ふた憐憫の極みなる神があなたの父であり給ふならば、どうしてあなたを捨子にして養ひ給はないことがあるでしようか。あなた一人位を養ふ能力が神にないと思ふのですか。お信じなさい。あなたの主イエス・キリストとその父なる神とをお信じなさ